

# 日本における世界史教育の歴史（I－1）

## — 「普遍史型万国史」の時代 —

### History of World History as a Subject of School Education (I-1) — On an Age when World History was taught by Textbook modelled after a pattern of “Universal History” —

岡 崎 勝 世\*

Katsuyo OKAZAKI

#### 〈 目 次 〉

はじめに

第1章 学校教育体制創始期における世界史教育  
(1872、明治5～1879、明治12)

1. 『史畧』（明治5）と『萬國史畧』（明治7）
2. グッドリッチ『パーレー萬國史』
3. 普遍史型万国史教科書とその原典

第2章 学校教育体制模索期における世界史教育  
(1879、明治12～1886、明治19)  
— 啓蒙主義的世界史への傾斜 —

おわりに

はじめに

日本の世界史教育の歴史を教科書の特質の側から見た場合、最も大きな区切り方として、三つの時代が存在したと考えられる。最初が「万国史の時代（明治5～明治35）」、第2は歴史が国史、東洋史、西洋史に分けて教育された「三科目分立の時代」、第3は、「世界史」という教科が成立した1949（昭和24）年以後、今日もなおその下にある「世界史の時代」である。

この「万国史の時代」は、「翻訳教科書」の時代でもあった。しかし、従来、「翻訳教科書」の原典そのものに関する研究は極めて少なかった<sup>(1)</sup>。筆者自身はこれまで西欧の世界史叙述の歴史を追求してきたが、本稿の契機となったのは、このような状況に対して、筆者にも多少は貢献出来ることがあるのではないかと考えたことであつた。また、本稿では、原典となった西欧の教科書について、その内容や西欧歴史学におけるその位置の紹介を重視して進めることにした。このことも、このような従来の状況を考慮したからである。

筆者なりの観点から見た教科書の変化は日本における教育制度の変遷と無縁ではなく、実際に、両者の推移はほとんど並行している<sup>(2)</sup>。今回考察の対象とするのは、「万国史の時代」を構成する二つの時代のうちの最初の時代、日本における最初の世界史教科書が、筆者のいう西欧の「19世紀的普遍史」を基礎とし、「普遍史型万国史」が編まれた時代である。

本稿は2章からなるが、それは、「普遍史型万国史」の時代が、学校教育制度史の変化に対応した二つの時期に区分することができるからである。即ちその第1期（第1章）は学校教育体制創始期に当たり、1872（明治5）年に公布された「学制」

\* おかざき・かつよ  
埼玉大学名誉教授

により旧教育制度が全廃されて、近代的教育制度が創出されていく時代である。この「学制」の時代は明治12年に終わる。新たに「教育令」が制定され、同時に、歴史教科書の始点となった『史畧』と『萬國史畧』も、その歴史的使命を終えているからである。

第2期（第2章）は学校教育体制模索期、「教育令期」とも呼ばれる期間に当たる。この時期には、「教育令」の二度にわたる改正を経て、内閣制度発足に伴う初代文部大臣森有礼により教育改革が行われる1886（明治19）年まで、「学制」下で生じた諸問題解決のために、教育制度の改善が試行された。教科書の面では、この第2期も、まだ「普遍史型万国史」の時代である。しかし世界史の教育は、第1期では義務教育課程と規定されていた「尋常小学」で教えられたのに対し、第2期に入ると、12歳から中学校に進学すること定められたため、年齢は同じく12才ではあるが、「初等中学」の場で教えられることとなった。また第2期では、「学制」期と異なって啓蒙主義的世界史の影響力が次第に強まり、次の「文明史型万国史」の時代への移行期となっている。

## 第1章 学校教育体制創始期における世界史教育（1872、明治5～1879、明治12）

維新政府は1871（明治4）年7月14日に廃藩置県を断行し、4日後の18日、文部省を設置した。翌明治5年8月2日には、新たな公教育制度として、小学校から大学に至る近代的教育制度を定めた「学制」を太政官布告として公布した（表1・1）<sup>③</sup>。

表1・1 「学制」下の教育課程と尋常小学

6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	・	・
下等小学	上	等小学						下等中学	上	等中学				大学			

### 尋常小学の編成

下 等 小 学									上 等 小 学							
年齢	6	7	8	9	10	11	12	13								
級	8	7	6	5	4	3	2	1	8	7	6	5	4	3	2	1

「学制」は、「尋常小学ヲ分テ上下二等トス此二等ハ男女共必ス卒業スヘキモノトス」（第27章）と規定している。歴史については、上等小学で学ぶ教科として「史学大意」が挙げられている。さらに、「学制」公布の翌月に文部省が頒布した「小学教則」で、尋常小学における教育の詳細が示された。これによると、万国史の授業は上等小学第4級、12歳になって開始され、「輪講」形式（表1・2、生徒の教科書自習を前提に、生徒に輪読させたり、解説させたりするという方法の授業）<sup>④</sup>で行われた。

表1・2 小学規則による上等小学、歴史輪講

第七級；「王代一覽等ヲ獨見輪講セシム」（週二時）
第六級；「國史略等ヲ獨見シ來テ解説セシム」（週二時）
第五級；週四時で前級同様
第四級；「萬國史略ノ類ヲ以テ獨見輪講スルコト前級ノ如シ」（週二時）
第三級；「五洲記事等ヲ獨見輪講スルコト前級ノ如シ」（週二時）
第二級；週二時で前級同様
第一級；週一時で前級同様

世界史関係の教科書では中国史（東洋史）関係のものが挙げられておらず、西村茂樹『萬國史略』（明治2）、寺内章明『五州紀事』（明治4）のみが挙げられている。前者はアレクサンダー大王の死で終わっているのも、それ以後現代までを後者で学ぶように考えたのであろう。しかし、両著はともに大人向け西洋史書であり、当時まだ教科書として編まれた書籍がなかったため、日本史も含め<sup>⑤</sup>、大人用の書物を教科書に流用したのである<sup>⑥</sup>。

## 1. 『史畧』（明治5）と『萬國史畧』（明治7）

一方、文部省自身も、新たな学校教育に見合う教科書を早急に整えることの必要性を早くから認め、「学制」の準備作業と並行して既に教科書の編纂も進めていた。即ち、明治4年9月に省内に設置した「編輯寮」で教科書編纂に取り組みはじめ、明治5年5月に師範学校が開校されるとこれとも

協力して作業を進めていたのである。そしてその結果が、日本最初の歴史教科書『史畧』（明治5）であった。その後、「編輯寮」は、機構改革で消滅する。しかし、担当部署は様々に変わるが教科書編纂事業自体は継続され、その結果、『史畧』では同一書の内に編入されていた世界史と日本史を分離し、各々をより詳細にした教科書、『萬國史畧』（明治7）と『日本畧史』（明治8）とが刊行された。これらはいずれも文部省が刊行したもので、以後は、全国で広くこれら官版の『日本畧史』と『萬國史畧』とが使用されるようになった<sup>7)</sup>。また、後に見るように、この頃になると文部省だけでなく民間の出版社からも万国史の教科書が出版されるようになった。

### 「万国史」という呼称の由来

「万国史」という言葉の最初の使用例は、小沢栄一氏によれば<sup>8)</sup>、渡辺崋山『外国事情書』（1839、天保10）であった。しかしこれは「秘稿」だったから、公的に知られることはなかった。公刊された歴史書での使用ということになると、手塚律蔵『泰西史略』（1858、安政5）が最初の例となる。ただし彼は、“*Algemeene Geschiedenis*（一般史）”というオランダ語の訳語として、「凡例」中で使用しただけだった。書名での最初的使用者は、手塚律蔵の弟子、西村茂樹である。彼はエジンバラ大学の古代史・普遍史（*Universal History*）担当教授、タイトラの“*Elements of General History*”を『萬國史略』（明治2）として出版した。現代の研究者や翻訳家の場合、このタイトルを「万国史」と訳すことなど、思いもよらないことである。今日感覚では原語からあまりにもかげ離れた意識だからである。しかし西村の『萬國史略』は教科書として採用されただけでなく、様々な「万国史」の嚆矢となった。箕作麟祥<sup>あきよし</sup>『萬國新史』が直ちに続き、以後数々の教科書のタイトルにもなり、多数の一般向け「万国史」が刊行され

る時代を迎えることになるのである。

「万国史」という呼称が急速に広がった理由は、それが当時の一般的な意識をうまくすくい上げていたからだと考えられる。というのは、「書名に『万国』を冠したというだけなら、江戸時代の地理書にはたくさんある」<sup>9)</sup>と指摘されており、西欧を「万国」が織りなす世界とすることは、既に幕末期には広く行われていた。また慶応4年の「慶應義塾之記」の「日課」には、「パルレイ氏コモンスクール万国歴史会読」、「ペイトルパルレイ氏万国歴史素読」が挙げられているというから、福沢諭吉も使用していた。但し、彼の場合は、後述する『ピーター・パーレーの普遍史（*Universal History*）』を「万国史」と訳したことになる。一方、文部省が刊行した教科書、『史畧』と『萬國史畧』の内容は、人々が眼前にしていた「世界」を諸国家（＝「万国」）の集合体として捉え、そのような世界の歴史的形成過程を、国家を単位として記述している。その基礎に見られるのは、これを通じて世界における日本の位置と課題とを自覚した人材を育成しようという目的意識である。あるいは、国家としての独立を維持し、世界に覇をとっていた西欧諸国に伍して自らも近代国家の仲間入りを果たそうとする課題意識である。

「万国史」は、西欧世界を呼ぶ言葉として定着していた「万国」を使用し、かつ当時の課題意識に基づく世界史認識への希求に呼応した呼称となっている。原題にない「万国史」が訳語に採用されたのも、また定着したのも、この「意識」が、当時の人々が歴史書に求めた内容を表現する最適な言葉だったからなのであろう。

### 『史畧』、『萬國史畧』の構成

最初に二冊の教科書の構成を見ておきたい。表1・3は『史畧』、表1・4は『萬國史畧』と『日本畧史』を合わせて作成したものである。

表 1・3 『史畧』（明治5）の構成

《アメリカ洲》			《ヨーロッパ》			《アジア洲》			期前天皇 神代天皇
【近代】	アメリカ	1500年	ロシア	フランス ジャンヌ・ダルク	イギリス マホメット	トルキ ギリシヤ	イタリヤ	清 明元南宋 周漢 唐 宋 明 清 元	

インドとペルシアには、各々4頁が与えられているのみであるから、確かに中国史を重視している。だが中国は、オリエント諸国、ペルシア、インドなどとともに「アジア洲」の一員なのである。

### 「皇国」としての日本史

『史畧』では、日本史が「神代」と「人皇」に時代区分されている。「神代」では天御中主神から鸕鷀草葺不合尊までの神々の系譜が記述されている。「人皇」の最初はもちろん神武天皇である（以下の引用は、一部旧漢字、変体仮名を変更。片仮名のふりがなは原著による）。

第一代神武天皇と申す鸕鷀草葺不合尊の御子なり辛酉の歳大倭橿原宮にして即位します初め天皇日向より東征して都を中洲に定めんとして親ら皇族を帥て名髓彦及び諸の賊を誅伐し遂に大倭に入宮殿を榮造して帝位の禮を行ふ

以後は、第122代の今上天皇まで、全ての天皇の名が欠けることなく連ねられている。明治天皇については、次のように記されている。

第百二十二代今上天皇孝明天皇の御子也徳川慶喜大政を歸納し天皇萬機を親裁し給ふ鎌倉以来凡七百年來の舊弊一洗して大政復古江戸を以て東京と改め皇居とす神武天皇元年辛酉より今年辛未に至りて二千五百三十一年也

この二例はともに最も長い記述にあたり、4割近い47名は、引用文最初の一行同様、「第〇代〇〇天皇と申す。〇〇天皇の御子也」のみの記述ですまされている。全体が18丁で記述もごく簡単なのは、小学生に暗唱させるためである。そしてその暗唱を通じて、神代に連なる万世一系の天皇を頂いてきたという日本の歴史の特性と、そこでの

明治維新の正当性について、生徒を意識づけることが目指されている。

『日本畧史』は神武天皇から始められているが、そこで天照大神から語られているから、神代を含む歴代天皇史であるという点では『史畧』と同様である。ただ、記述がより詳細になっていることで、記述者の視点や姿勢をうかがうことのできる文章が見られる。その一例は第26代武烈天皇であるが、「天皇、刑律を好み、法令厳明ナリ、諸々ノ酷刑、親臨セザルハナシ、民皆震怖ス」と記している。第58代、陽成天皇の項も、その一例である。

『史畧』ではこの天皇の時に『文徳天皇実録』が成ったことしか書かれていないが、本書ではそれに加え、「天皇、遊嬉度無ク、屢々不辜ヲ殺ス。是ニ於テ基経公卿ト謀リ、天皇ニ請ウテ、位ヲ譲ラシム」と述べている。陽成天皇は宮中で殺人事件を起こしたと伝えられる天皇である。このように『日本畧史』は、全ての天皇を聖人君子として美化しているわけではなく、度はずれて暴虐で、罪もない人を殺した天皇すらいたことを明記するという姿勢も有していたのである。

後に問題となってくるこのような要素も含まれているが、全体として見ると、そこでは日本の世界における独自性が明示され、「大政復古」により成立した維新政府の歴史的正当性が説明されている。さらに、世界における今後の日本のあり方、進むべき道までもが、この「皇国」という表現に込められているのである。

### 万国史の一構成要素としての中国史

『史畧』第二巻「支那」では冒頭に「夏 殷周 秦 漢 東漢 三国(魏) 晋 東晋(宋 齊 梁 陳) 隋 唐 五代(梁 唐 晉 漢) 宗(宋 遼) 元 明清」と書かれていて、その内容が歴代王朝史であることが示されている。例えば「秦」では、以下のように、始皇帝のみが記述されている。

始皇帝

周に代わりて國を分て三十六郡としシユイカン守尉監をゲンケンおく。後代郡縣の制ここにはじまる命を制とし令を詔としみづから稱して朕チンといひ諡オクリナの法をのぞきおのれを始皇帝と稱し後世をかぞへて二世三世より萬世までにいたらむとせしに三世にして亡びたり

このように各王朝ごとに何名かの帝王とその事績、王朝の存続年数が記されている。始皇帝に関する記述はこれで長い部類に入り、全体も「皇国」と同じの分量（18丁）となっていて、極めて簡略化された王朝史となっている。

ただし、記述は、「夏」から開始されているわけではない。本文にはいと最初いきなり天皇、地皇、人皇、有巢、燧人の名が列記され、「以上太古といふ」とされている。続いて伏羲、神農、黃帝の三皇、さらに金天、高陽、高辛、堯、舜の五帝が挙げられ、舜から天子の位を譲られた禹によって「夏」王朝が成立したとしている。太古から三皇五帝の時代が、王朝時代に接続していると記述されているのである。

この点は、『萬國史畧』でも変わっていない。上述したように、アジア洲の冒頭に「漢土」として中国史が記述されている。分量は『史畧』の「支那」の倍近くに拡大されており、それだけ詳細になっている。記述が詳細になっているとはいえ、しかし、中国は、構成からいえばあくまで「万国」の一員である。

### 中国史は『十八史略』を簡略化して記述

天皇から燧人、さらに三皇から五帝の少昊金天氏、顓頊高陽氏、帝嚳高辛氏、帝堯陶唐氏、帝舜有虞氏に至るまで、『史畧』と全て同一の記述を残しているのは、13世紀末頃に曾先之が編んだ『十八史略』である。『十八史略』は、「すでに幕末の天明刊本のたびたびの翻刻」から始まって「明治

の二十年間に大流行し、今日のような中国古典の位置を占める」<sup>9)</sup>に至った史書である。筆者は、中国自体では古典の扱いを受けていない本書がこれほど明治時代に重んじられたことに関連して、注意すべきことが二点あると考える。

まず第一に、中国史が万国史の一構成要素とされているという、その位置づけとの関係に注意しなければならない。そこでは「支那」は、アジア洲の一国にすぎない。その歴史も、インドなどと同様、アジアで展開されてきた歴史の一部に過ぎないのである。つまり世界を天竺・震旦・本朝から成るとしてきた伝統的な「三国的世界観」が、小学校教育の場で明確に否定されている。しかも「支那」（とインド）が有していた地位を奪い、日本に対して決定的に重要な意味を持つと位置づけられているのは、分量的に『史畧』全体の約三分の二、『萬國史畧』でもほぼ同様な割合を占める、「西洋史」なのである。この、万国のうちの単なる一国という位置への中国史の転換は、まことに大きな変革であったと言わなければならないであろう。そして『十八史略』は、かかる転換された評価のもとで中国史を通覧するために、最も便利な歴史書として選ばれたというべきであろう。

もう一点注目したいのは、「夏」以前の時代の記述との関係である。『十八史略』には、例えば「天皇」には兄弟が12人あり、各々が一万八千歳だったとか、三皇についても、伏羲は「蛇身人首」、神農は「人身牛首」だったなどとある。聖書にはアダムは930歳まで生きたとか、古代ギリシアでも、アテネ初代の王ケクロプスは大地から生まれとされ、腰から下が蛇の姿で描かれた。クレタ島の迷宮に閉じ込められたミノタウロスは人身牛頭であった。『十八史略』は、「天皇」以後、初めて家をつくって住んだ有巢、火をもたらした燧人等の神話時代や農業を人民に教えたミノタウロスのような姿の神農等を記述し、三皇五帝に連続させて、

夏・殷・周の「三代」以後の王朝史を記述している。このように『十八史畧』が王朝史を神話時代につなげて行っている記述が、日本史を神代から人皇の時代へと連続するものとしている記述と、同じ構造になっているのである。この共通の「構造」もまた、『史畧』と『萬國史畧』の著者が『十八史畧』を中国史記述の基礎として選択した理由ではなかろうか。

### 万国史で決定的地位を占めるのは西洋史

西洋史は分量的にのみでなく、位置づけからいっても、万国史記述では東洋史よりも重視され、決定的な位置を占めている。

『史畧』でも『萬國史畧』でも、19世紀に至る西洋史で記述される国々は同じである。特に『史畧』では、簡便にするための配慮であろうが、アジア洲に領土を持つ国家で中国以外に採り上げられているのは、オスマン帝国のみである。とはいえオスマン帝国は「西洋史」の中で記述されている。これに対しヨーロッパでは、英・米・独・仏・露などの列強だけでなくイスパニア、ポルトガル、オランダ、ベルギー、北欧諸国からスイス、ギリシアに至るまで、近代ヨーロッパ諸国のほとんどが網羅され、国ごとに、紀元500年以後の歴史が記述されている。こうした西洋史の記述が示しているのは、インド史を省いてでも、西欧諸国を網羅的に記述するほうを優先させるという考え方である。

このような構成は、19世紀という「国民国家」の時代がもたらしたものだと言えよう。『史畧』に「國<sup>もつ</sup>を以て分つ」(緒言)という原則を与え、西欧諸国を細大漏らさず記述させたのは、国民国家を発展させてきたのは西欧諸国だったとする認識だと考えられるからである。そしてこの考え方が世界の歴史を「万国史」の名で呼ぶ原因となり、さらに、各国別に記述するという、世界史全体の構成の仕方を根本で規定しているのである。

### 万国史における西洋史像

『史畧』の西洋史像を見よう。西洋史の巻の「緒言」で、内田正雄(1839、天保10-1876)は、「古今の歴史概ね皆年代を上古中古近代の三段に分てり」と、いわゆる「三区分法」を紹介している。上古は「世の未だ開けざる初めより紀元五百年まで」、中古は「五百年より千五百年まで」、近代は「千五百年より今日まで」とするが、「然れども此の書國を以て分つが故に中古と近代の區別を為すときは反て混雜を生じ易きが故に今之を分たず」と言う。実際、紀元500年以後は、国別に、「中古」と「近代」を分けることなく一気に19世紀末まで辿っている。表1・3と表1・4の時代区分で【上古】、【近代】に対し(中古)としたのは、「中古」という用語は紹介しているものの、このように、実質上は使用されていないからである。

一方、「西洋の説にてハ」と断っているが、「上古」で最初に出でてくる固有名詞はノアである。すなわち、チグリス、ユフレート両大河の傍らで最も早く人民が栄えたが、「紀元二千四百年前」に起こった大洪水で、彼とその家族のみが生き残ったと言う。二番目に登場するのは、初めてバビロンという国を開いたニムロットである。ニムロット(ニムロデ)はノアの三人の息子セム、ハム、ヤペテのうちのハムの子孫で、創世記第10章に「世の権力者となった最初の人である」と記されている。つまり西洋史は、アダムこそ登場しないが、聖書の記述に従って歴史の始まりが記述されているのである。

次に最初の世界帝国アッシリアが記述され、フェニシア(フェニキア)、ジュース(ユダヤ)、バビロニアの時代を挟み、続いて三大世界帝国、即ちペルシア・ギリシア(=アレクサンダー大王以後)・ローマの各帝国の時代に進む。全体として強調されているのは、アッシリアを含め、四つの世界帝国が継起したということである。そして「歐

羅巴洲居民の大遷徙」(＝ゲルマン民族の移動)のなかで西ローマ帝国が亡んだ後、メロウエーの孫クロウイスが 500 年頃にフランク王国を建設し、以後、ヨーロッパ諸国が形成されてくると述べ、この年を画期として、ヨーロッパの各国史につないでいく。

具体的記述を見ると、どの国も、中国史同様、王朝と主な国王や英雄の事績の記述で占められている。諸国家の消長や王朝の交替などの治乱興亡(政治史)が中心で、社会・経済史や文化史と言える要素がほとんどない。なかには誤りもある。ユダヤ人の歴史で、「ジュジャ」(＝ユダ王国)がアッシリアに亡ぼされ、「イスラエル」(イスラエル王国)が「バビロニヤ」(＝新バビロニア)に亡ぼされて住民がバビロニアに移されたとしている。しかし全体としてみれば、今日の中学生の年齢にあたる生徒用の教科書としては、非常に詳細な政治史になっている。

『萬國史畧』は、『史畧』とは構成が若干変わったところはある。ペルシア史とギリシア史を、「上古」の時代から現代まで切り離さないで一気に記述したり、また、古代オリエント史を「アジア・トルキ」の節で記述するなどが、その例である。しかし、内容はより詳細になったとはいえ、構成は同一である。補充された部分で紹介しておくべきことは、「アジア・トルキ」の項目の内の、次の一点くらいである。

即ち、やはり「西洋ノ説ニハ」と断りつつ、以下のようにアダムからノアの大洪水までが記述され、「前世界」と呼ばれている。

世界ノ開闢シテ、人間ノ生成セル始ハ萬國ノ説ニ、各異同アリテ、何レヲ實ト定メ難シト雖モ、西洋ノ説ニハ、紀元前、凡ソ四千年ノ頃(神武天皇紀元前凡三千三百五十年)ニ當テ、此國今ノメソポタミアノ中央ナル、ユーフレテース

ト、名ヅクル大河ノ近傍ニ於テ、男女二人初メテ、化生シ、男ヲアダムト云ヒ、女ヲイブト云ヒ、是ヲ人間ノ始祖ト為ト云フ、…其後、紀元前二千三百四十年ノ頃(神武天皇紀元前凡千七百年)ニ當テ、大洪水起リ、五月ノ間相續キ山野盡ク水ニ涵リ、萬物悉ク溺没スト云フ、蓋開闢ヨリ、洪水ニ至ル迄凡ソ千六百五十年間ノ世ヲ、前世界ト唱フ、

最後に、「佛蘭西國大騒亂」(＝フランス革命)の記述を見てみよう<sup>(10)</sup>。『萬國史畧』の文章を引くが、『史畧』もほぼ同じ記述である

ルイ十六世ハ、仁惠ノ君ナレドモ、此國古來ノ弊風ニ因テ貴族ト僧官ノミ、威權ヲ擅ニシ、門地アル者ハ、座食シテ奢ヲ極メ、常ニ賦税ヲ重クシ庶民ヲ虐ゲシカバ、國民皆政府ヲ怨ムコト深ク、将ニ大騒亂ヲ起サントスルノ兆、已ニ顯レタリ是ニ於テ紀元、千七百八十九年、大集會ヲ開キ、國內ノ貴族、及ビ國民ノ名代人ヲ、諸洲ヨリ呼出シ、集議シテ、此流弊ヲ改メントセシニ、其説遂ニ一致セズ、其間、種々ノ徒党起リ、互ニ相争フテ、動揺已マズ、紀元千七百九十一年(光格天皇寛政三年)終ニ大騒亂ト為リ、ロベスピエールナル者、過激党ノ巨魁ニシテ、最モ殘虐暴虐ヲ極メ、國王及ビ王妃ヲ獄ニ繋ギテ、之ヲ弑シ、貴族ハ捕ヘテ、盡ク首ヲ刎ネ、凡ソ平民ヲ苦シメシ者ハ、殺シ盡シテ、殘スコトナシ、此激徒、終ニ政事ノ全權ヲ握リ國體ヲ變ジテ、合衆政治ト為ト雖モ、徒党幾個ニモ分レ、互ニ相殺シ、ロベスピエールノ党ノ如キモ、亦盡ク殲滅セラレ、彼ノ華美ヲ極メタルパリスノ都城ハ、忽チ積屍ノ山ヲ為セドモ、内亂終ニ止ムコトナシ

この文章については、『パーレー萬國史』との関



係で、後に触れることにしたい。

## 西洋史でも神話・伝説から開始

この西洋史像については、特徴を二点挙げることができる。一つは、繰り返しになるが、19世紀の世界が「万国」が織りなす世界とされるに当たって、西欧諸国には、この現状への先導者という位置が与えられていることである。

第二の特徴は、西洋史においても、その「太古」における歴史の始まりが聖書や神話・伝説によって記述されていることである。アッシリアの記述もこれに属する。というのは、その内容を『萬國史畧』で見ると、それは今日の世界史教科書で見られる、前7世紀に西アジアを大統一したアッシリアではない。その祖先は「ノアの孫、アシュル」、建国者はニニウス（ニヌス）とされ、彼は都のニニブ（ニネヴェ）を建設した（『史畧』には、「是れ紀元二千年前の事なり」とある）。そして隣国の「バビロン」を滅ぼして大国となった。続いて後のセミラミスがバビロンに都を移し、広大な居城を建設し、領土もインドまで拡大した。このアッシリアが亡ぶのはサルダナパレスの時、「紀元前凡ソ八、九百年」である。そこでは、バビロンの民に攻められ、「自ラ宮殿ニ、火ヲ放チ、許多ノ珍寶、宮女ト共ニ燹ノ中ニ焚死シテ亡ブ」と記述されている。これはバイロンの劇詩『サルダナパール』（1821）に基づき、ドラクロワが「サルダナパールの死」（1827）で描いた、アッシリア王の最後そのものである。即ちこのアッシリア史像は、古代ギリシア人が伝えた「伝説のアッシリア」<sup>(11)</sup>に他ならないのである。

西洋史全体は、このように人類史も古代諸国史も神話・伝説から始まり、そしてそのような古代史に各国史を接合して構成されている。この点で、西洋史も、日本、中国などの歴史と同一の構造を有しているのである。

## 2. グッドリッチ『パーレー萬國史』<sup>(12)</sup>

既に述べたように、当時は欧米、特にアメリカの教科書を翻訳したものが多く、「翻訳教科書時代」<sup>(13)</sup>と呼ばれている。大槻文彦も、『萬國史畧』の「例言」で「西史ハ翻譯ヲ歴テ文ヲ成ス」と述べている。『史畧』、『萬國史畧』の底本については、アメリカで「当時歴史教科書を代表していたグッドリッチの『パーレー萬國史』などから編集の基本となる方針をとっていると見られる」<sup>(13)</sup>とされており、これが定説的見解となっている。

だが、『パーレー萬國史』とは、如何なる特質を有する教科書だったのだろうか。阿野文朗氏は、「もともと啓蒙的な教養書として企画されたものであるから、明確な史観に裏打ちされて書かれた歴史書ではなく、当然のことながらその学問的価値は低い」<sup>(14)</sup>とし、学問的価値が低いものだったが故に、日本にドイツ歴史学が導入されると、そのレーゾンデートルを失っていったとされている。アダムやノアから開始することだけでもその非科学性を強く感じさせるものであり、こうした評価は、今日から見れば、当然とも言える。だが阿野氏だけでなく、これまでの他の諸論文でも、この『パーレー萬國史』が、西欧の世界史記述の歴史において如何なる位置を占めるものだったかについての検討は、なされることがなかった<sup>(15)</sup>。

これに関しては、以後の議論に先立って、まず筆者の結論から言っておきたい。『パーレー萬國史』は、西欧における伝統的・キリスト教的 world history = 「普遍史」のうちの、「19世紀的普遍史」の類型に属する歴史書だったのである。

### 日本における『パーレー萬國史』

『パーレー萬國史』の導入には、二つのルートがあったとされる。最初にこれを日本に伝えたのは福沢諭吉（1835、天保6-1901）である。彼はその第二回目の渡米（1867、慶応3）の時にボストンで購入し、26冊も仙台藩に届けている。このと

き同時に慶應義塾の教科書としても購入しており、彼は本書を「古今未だ曾て目撃せざる所の珍書」<sup>(16)</sup>と呼んで重視し、上述したように、実際に使用したのである。

もう一つの導入口となったのは、文部省であると言われる。お雇い外国人フルベッキ（Guido Herman Fridolin Verbeck, 1830-1898）が、明治5年3月、教科書編纂事業が難渋しているのを見て行った具申が、その契機となった。彼は「地球」（＝地球儀）、黒板、「胡粉」（＝チョーク）等の購入などを推奨し、各教科ごとの図書も、国内にあるものはすぐに反訳すること、無いものは直ちにアメリカから取り寄せることを進言した。そのうち歴史教科書では、彼は「グードリッチ氏歴史」を推薦した。文部卿大木喬任<sup>たかとう</sup>はこれを見て「大いに喜び、すぐ全部を米国へ注文した」<sup>(17)</sup>という。このように本書は、『史畧』や『萬國史畧』等の編纂事業との関係からも輸入されたのである<sup>(18)</sup>。

こうして導入された『パーレー萬國史』は、「明治時代における国民教養の最も広い底辺部を占めたもの」<sup>(19)</sup>となった。新渡戸稲造（1862、文久2-1933）は盛岡の出身で明治8年に東京英語学校に14歳で入学しているが、その回想では、「パーレーの万国史を読む者は世界の事情に精通せる者と看做され」<sup>(20)</sup>たという。翻訳書も、早いものでは寺内章明訳編『五洲紀事』と寧静学人（石川彝<sup>つね</sup>）の抄訳『西洋夜話』（ともに明治4）があり、これ以後、全訳も続々刊行された。鹿鳴館時代に当たる明治16年から20年までの間だけで、過去の翻訳の再版と新訳などが、14名の訳者により16種類も出版されたと紹介されているほどである<sup>(21)</sup>。

さらに、それは「明治時代の英語教科書で最もよく使用されたものの一つ」<sup>(22)</sup>だった。戦前の中学校では「英語の入門が終わると『パーレーの万国史』を読むことになっていた」<sup>(22)</sup>のである。長谷川如是閑（1875-1969）も中学校時代の回想のな

かで述べている<sup>(23)</sup>。

父が私の頭を、それでひっぱたいいたパーレーの万国史というのは、そのころこの中学でも使っていた、すこぶる古い型の、はじめの方は旧約聖書のぬき書きのような相当分厚の本だが、私は『ユニオン第四リーダー』に懲りてリーダーと名のつく本を見ると憂鬱になるので、そのパーレー一本立てで勉強した。

翻訳は、1890（明治23）年代に入ると消滅していく。だが英語教科書としての寿命はもっと長く大正初期まで使用され、日本で翻刻されたもの、さらには訳注書や独習用の参考書、字引など、種々のものが出版されている<sup>(24)</sup>。

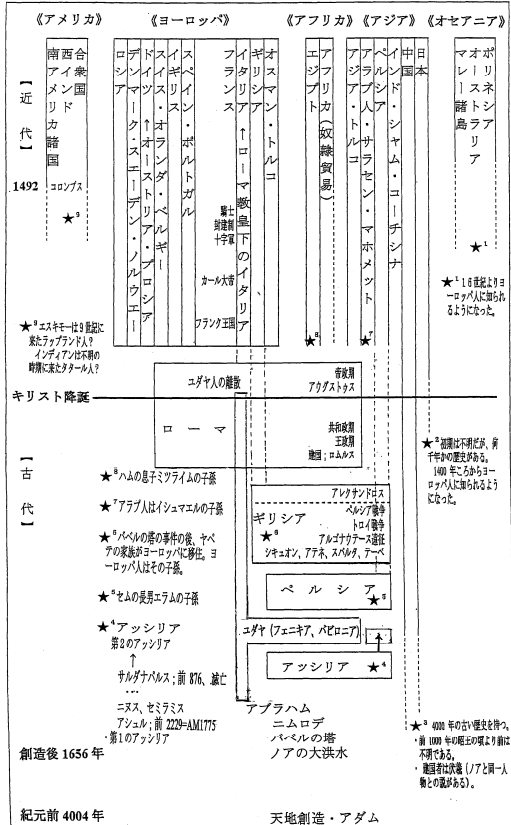
### 『萬國史畧』の底本、『パーレー萬國史』

『パーレー萬國史』が、『史畧』及び、『萬國史畧』の底本となっていることを確かめるため、まず、その構成をみよう（表1・5）

本書は、最初に地球上に存在する五大陸（アジア、アフリカ、ヨーロッパ、アメリカ、オセアニア）に関する地理学的説明から開始し、アジア以後、上の順で各大陸毎に、各国史の形式で19世紀に至る主要諸国の歴史が語られている。アジア大陸の歴史では天地創造からペルシアまで、さらにインド、中国史も語られている。続いてヨーロッパ大陸の歴史で、「北方からの侵略者」（＝民族移動、290）の時代後に成立してくるフランス、イギリス、ドイツ等々の西欧諸国を国ごとに記述するが、同じヨーロッパの国でもギリシア、イタリアなどは、上述したペルシア史同様、古代のギリシア、ローマの項目の中で引き続いて19世紀まで記述される。この構成は、表1・3及び表1・4と比較すれば明かなように、ユダヤ人の歴史の特殊な位置の問題を除けば、『史畧』及び『萬國史畧』と全く同一といってよい。

表 1・5 『パーレー萬國史』の構成

(Goodrich, S.G., *Peter Paarley's Universal History, on the Basis of Geography, 1870* (1837))



だがユダヤ人の歴史に特別な位置が与えられていることに本書の特質が最も明瞭に現れているので、ここで立ち入って述べておきたい。本書はアダム、ノア等からアッシリア史を挟んでユダヤ人の歴史に進むが、その歴史を紀元 70 年まで語った後、あらためてペルシア史に戻ってローマまでを記述する。頁数も、これにアジアの古代史約 100 頁の、ほぼ半分を当てている。この間、彼らの歴史と関係する限りで、後述する第二のアッシリアはじめフェニキアについて「商業を始めた国」(71)と紹介したり、バビロニアに関してはユダ王国を亡ぼしたネブカドネザルについて簡単に触れている。だがそれよりは預言者たちの活動、その預言の実現としての「救世主」出現への流れのほうが詳しく追跡されている。その記述が終わる紀元 70

年は、ユダヤ人のローマに対する反乱がウェスパシアヌス帝によって鎮圧され、イエルサレムが破壊されて彼らが故地から追放された年、いわゆる「離散」時代の始まりにあたる。この事件は、キリスト教徒にとっても極めて重要であった。それは、彼らにとってこの事件は、「神の国」の担い手の役割を神がユダヤ人から奪ってキリスト教会に与えたことを意味したからである。イエス生誕を画期とする「旧約時代」から「新約時代」への転換は、キリスト教的世界史(普遍史)における、最重要事件であった。その転換の過程が、キリスト教会の形成と「離散」の開始とをもって完結するのである。だが、逆に言えば、キリスト教会成立以前の時代(=旧約時代)においては、アブラハムから「離散」に至るまでのユダヤ人の歴史は、人類史を貫く神の節理が示される「神の民」の歴史ということになる。我々から見れば、彼らの歴史はオリエン特史の一部であるから、それはアッシリアやペルシアなどの動向によって規定されているように思われる。ところが、伝統的なキリスト教的観点からは、関係が逆転して見えることになる。神が行う人類教育は、アッシリアなどではなく、「神の民」の歴史に現れるからである。そこでその教育の諸段階が、アブラハム、ダビデ、バビロン捕囚の事件や預言者などを指標として区分された。そして普遍史では、この時代区分のほうが古代史全体の歩みの目盛りの役割を持つと考えられて、これにアッシリアやペルシアなど「世俗」の国家の歴史を組み込むことが行われたのである。ユダヤ人の歴史が本書で特別詳細に語られるのは、まさに、この普遍史の作法に従ってのことなのである。

『萬國史畧』との比較に戻ろう。両者はまた、時間的枠組みが同一である。例えば『萬國史畧』では「前四〇〇〇年頃」と記されている天地創造を、グッドリッチは前 4004 年としている。同様に

「前三四〇年ノ頃」のノアの大洪水は創造後 1656 年、「紀元前凡ソ八、九百年」の第一のアッシリア（＝伝説のアッシリア）の滅亡は前 876 年とされている。グッドリッチが記す年号は、後述するアッシャーに依拠したものであった。『萬國史畧』も、数値を丸めているとはいえアッシャーの年号を記していることになる。

フランス革命の記述については、『パーレー萬國史』では、まず国王の善良さに触れたりアメリカ革命の影響で人々がアメリカ人の自由と繁栄を知ることにつれて王政よりも共和政を良しとするようになったと指摘している。続いて大事件が起こると「民族全体が殆ど気が狂ったように」（411）なる激しやすいフランス人の性向を指摘し、続いて以下のように述べて、フランス革命に対する批判的態度を表明している。

この時もそうしたケースに当たっていた。彼らは、今や、国王、王妃、貴族、僧侶、貴紳、及び以前は彼らが敬意を払っていた全ての人々を罵りはじめた。彼らは天そのものまでも冒瀆する至った（411）。

以後はバスチーユ襲撃における民衆の行動、特に国王処刑については詳しく記述し、ギロチンによる多数の人々の処刑や、ロベスピエールら「一連の血に飢えた怪物たち」（415）による大量の人々の処刑について縷々書き連ねていく。『パーレー萬國史』は、こうして、国王に同情を寄せ、民衆の王侯に対する暴力的反逆と権力奪取の行動を糾弾している。さらには「天」（＝キリスト教の神）に対する冒瀆を厳しく批判している（具体的記述はないが、後述するように、特に意識されているのはロベスピエールによる「理性の祭典」、革命暦による安息日の廃止である）。これに対し『萬國史畧』は、残虐な流血事件の記述の細部は、大部分省い

ている。しかしロベスピエールの「残虐暴虐ヲ極メ」た統治については言及しているから、原典ほど明確ではないにしても、革命に対する批判的態度は表明していると言えよう。また、1789 年の「大集会」を書き加えたりアメリカ革命の影響を削除している点はあるが、人権宣言、革命の理念などについて触れていない点も共通であるから、全体としてみれば、『パーレー萬國史』の要約となっていると見なしてよいであろう。

一方、『萬國史畧』に独自の部分も存在する。『パーレー萬國史』の日本史記述は全て削除されている。もっとも、日本については「2600 万の人口を持つ大きな帝国」（111）だが、その存在は 1400 年頃からヨーロッパ人に知られるようになってはきたが、オランダ以外と交易してこなかったためよく知られていないこと、ペリー提督の活動によって開国したばかりで、条約批准のためアメリカに使節が派遣されてきたこと、また日本人については「人々は偶像崇拜者である」（同）といった、約 700 頁の本文のうち実質 2 頁のごく簡単な記述が行われているだけである。中国史は 14 頁、インドに至っては半頁しか割かれていない。これに対し『萬國史畧』では、中国史が中国の原典に基づいてはるかに詳細に書かれている。さらに西洋史でも、『パーレー萬國史』とは異なる記述が見られる。最大の違いはユダヤ人の歴史の扱いで、アブラハムからローマ時代の滅亡までを 2 頁半に圧縮し、しかも、「神の民」ではなく、あくまで「猶太<sup>ユダヤ</sup>國」の歴史として述べている。また、フェニキア（1 頁）とバビロニア（1 頁弱）の項目を独立させている。フェニキアについては文字、数字、硝子、金銭の通用の発明など、文化の記述を補充している。ギリシア史でも、アイスキュロスの悲劇『テーバイにむかう七将』に描かれた「アルゴスの王とテーブスの王」の戦いなどが補充されている。これらの補充は、ひょっとして、西村茂樹（＝

タイトラー)の記述を利用したのかもしれない。

こうした相違があるにしろ、『パーレー萬國史』は、『萬國史畧』で対象とした国々を全て記述している。『萬國史畧』における各国史のおおよそは、その政治史記述の要約とも言える。また『パーレー萬國史』からはみ出している補充部分は、根幹と言うよりは枝葉に当たるとも言える。そして、以上のことは、『史畧』についても、全て当てはまる。

時代区分に関しては、先に『史畧』と『萬國史畧』の著者が「中古」という言葉は知っていても実質上は使用していないと述べた。『パーレー萬國史』の場合は、「中世」という時代概念を使用していない。また、『パーレー萬國史』が中世から(場合によっては古代から)19世紀までを各国別に記述するという『萬國史略』と同一の構成を採用しているのに対し、後述する当時既に日本で知られていた二人のイギリス人歴史家、西村茂樹が依拠したタイトラーと作樂戸痴鶯らが「譯編」したホワイトの歴史書は、これと異なる構成をとっている。このこともまた、考慮すべき点である。

『萬國史畧』は、『パーレー萬國史』をそのまま翻訳したものではあり得ない。『萬國史畧』の分量にするには、大幅な刈り込みが必須だからである。だが以上から、筆者も、『史畧』と『萬國史畧』の執筆者たちは『パーレー萬國史』から「編集の基本となる方針」を導きだし、それを基本に据えつつ、なおそこで不十分だと考えた場所について、別の史書から補充していったのであろうと推測している。

### アメリカにおける『パーレー萬國史』

『パーレー萬國史』自体は、ボストンの出版業者、グッドリッチ (Samuel Griswold Goodrich, 1793-1860) が企画した「ピーター・パーレーもの」の一冊であった。その初版は1837年に刊行されており(筆者が利用できたのは1870年版)、本来の

タイトルは、直訳すると『地理学に基づく、ピーター・パーレーの普遍史』である。ピーター・パーレーという名の老人が子供たちに物語るという形式で書かれ、他にも博物学、地理学、歴史学や聖書関係などの広い分野に関し「全部で百十六種類出版されたが、これがことごとく十九世紀のアメリカで大当たりを取った」<sup>(25)</sup>と言われる。合計七百万部以上も発行されたと伝えられるが、このシリーズがアメリカでは子供向け出版物の最初のものだったことも、人気に与っているであろう。「ピーター・パーレー」が自らの筆名であることを彼が最初明かさなかったこともあり、真の作者を巡って、アメリカでも日本でも議論があった。今日では、ホーソー (Nathaniel Hawthorne, 1804-64) が原稿を書き、グッドリッチが買い取って手を加え、出版したとされている。

グッドリッチは会衆派教会(組合教会)の牧師の家に生まれた。この教会は、ピルグリム・ファーザーズ以後のマサチューセッツの教会の流れを受け継ぐ、ニューイングランドで支配的な教会であった。兄も牧師となっている。そうした宗教的な基盤の上に立つ「ピーター・パーレーもの」は教科書としても広く使用され、本書については、その人気は「世界各国の地理の説明をもとにして歴史をつたえ、また当時の自然科学の発達をとりいれて少年少女の眼を世界へ開く啓蒙的なもので、しかも道徳的な甘さを加えられていた」<sup>(26)</sup>ことによるとされる。「道徳的な甘さ」とは、キリスト教的、より正確には、プロテスタント的な道徳を説いていることを意味する。アメリカは、現代でもなお、最も宗教が強い影響力を持っている国の一つである。まして19世紀のアメリカは、WASPの時代であった。そうした時代と精神風土に、マッチしていたのである。

### 『パーレー萬國史』— 19世紀的普遍史 —

『ピーター・パーレーの普遍史』の特徴を、三

つの側面から明らかにしておきたい。

第一に、これを現代(19世紀)の側から見ると、当時の世界を構成する主要諸国(植民地も含め)を網羅し、各々の発生から現在に至る歴史が記述されている。この点からは、それが「万国史」と訳されたことも、あながち誤訳とは言えない面があるとも言えよう。

だが第二に、「歴史の始まり」の側からこれを見ると、今日とは全く異なった原理に基づいている。一言で言えば、それは「聖書」を原理とするキリスト教的世界史、タイトルにあるとおり「普遍史(Universal History)」なのである。アダムとエヴァの創造以後の聖書の記述が歴史的事実として詳細に記述され、世界の諸民族がノアの息子たち、セム、ハム、ヤペテのいずれかの子孫と説明されている。中国史でも、その建国者を伏羲として「彼についてはある著作家たちはノアと同一人物と考えている」(101)と、聖書と関係づけている。古代は、アブラハム以後のユダヤ人の歴史が、その物差しとなっている。アッシリア、ペルシア、ギリシア、ローマの「世界帝国」を重視するのは、一見、今日の教科書と同様にも見える。だがこれも、世界を支配する四つの帝国が継起した後第四の帝国の滅亡と共に終末を迎えるとする、ダニエル書に基づくキリスト教的世界史(普遍史)の理論的支柱、「四世界帝国論」を継承している(ただし、第四の帝国「ローマ」についてのみは、後述するような事情から、一部変更している)。

長谷川如是閑は、本書の『「アジア人はアイドレーターである」』という一句が、妙に頭にこびりついている」(296)と述べている。実際、アジア全体の特徴を「停滞」とし、その原因が宗教に求められている。日本人の場合は上で見たが、中国では「人々は偶像崇拝に引き渡されている」(109)、インド人は「偶像崇拝に身を委ねている」(127)等、「偶像崇拝(者)」という言葉で特徴付けられ

ている。逆に「ヨーロッパでは、恒常的な進歩が見られる」(130)とし、進歩の理由をキリスト教に求めている<sup>(27)</sup>。

さらに、本書の第92章で、神の代理人だとする教皇の主張や行動を紹介して「いかなる暴君といえど、いまだかつて教皇たちに比すことができるほどのものは存在しなかった。それというのも、教皇たちは人々の魂に対して暴政を振るったからである」(324)と、極めて激しい批判を行っている。即ち、プロテスタントの立場で書かれている。

最後に、全体を支配している年号体系が、今日とは異なっている。数値だけを見るとキリスト紀元の年号とも見えるが、それは、今日の「西暦」ではない。注意して読むと、例えばアシュルの登場を「前2229年または天地創造後1775年」(38)としている。つまりその「前2229年」という年号は、「天地創造後」の年号＝「創世紀元」による年号と直接結合している。そしてその「1775年」は、天地創造を前4004年に置く、17世紀イギリスのピューリタン聖書年代学者アッシャー(James Ussher, 1581-1656)が与えた年号である。アッシャーの年号体系は、これからもしばしば言及するように、19世紀に至ってもプロテスタント的普遍史で広く使用されていたものであった。

第三に指摘しておきたいのは、それは、「普遍史」の最後の形態、「19世紀的普遍史」だということである。普遍史自体は、アウグスティヌスらによって形成された古代的普遍史に始まり、中世的普遍史を経て、プロテスタントの普遍史とカトリック的普遍史からなる近世的普遍史に至る。そして啓蒙主義の時代である18世紀にその没落が始まり、19世紀には、主導的世界史記述の地位から転落する。だがこのような時代でも、「普遍史」は消滅はしなかった。それは、なお、子供向けの宗教書や種々の学校の教科書の世界で生き残ったのである。

但し 19 世紀に入ると、伝統的な四世界帝国論は維持できなくなった。1806 年、それまで「第四の帝国」ローマの残存体とされてきた「神聖ローマ帝国」が滅亡し、現実的基盤を失ったからである。そこで新たな状況に応じて枠組変更が行われた。「古代」は西ローマ帝国の滅亡までとされ、他方、「神聖ローマ帝国」をドイツ史の一部に組み込み、この再編されたドイツ史やフランス史、イギリス史等々を並列させて、古代史に各国史を接続するという構成を採るようになる。その結果は、普遍史の内容を維持している「古代史」に、19 世紀に至る各国史を接ぎ木する形式＝「19 世紀的普遍史」となる。『パーレー萬國史』は、まさにこの構成を採用している。加えて、人種論に触れたり、未開から文明への人類の「進歩」に触れたりといった、19 世紀的なテーマや諸問題も取り込んでいる。こうして『パーレー萬國史』は、「19 世紀的普遍史」の一典型に他ならなかったのである。

ただし、最後に一点、付け加えておきたい。それは、この「19 世紀的普遍史」は、古代における神話・伝説の要素を除けば、決して荒唐無稽な歴史書ではなかったということである。普遍史は、一方で、古代以来の諸国や王朝の興廃など、歴史における大事件 (revolution) について、聖書に基づき、神が与えた恩恵や罰の例として評価し、位置づけた。そしてそれらを神による人間教育の一環として位置づけた。それこそが、普遍史の任務だったからである。だが他方、そこでは歴史上の具体的諸事実に関する膨大な情報が積み重ねられ、その結果、事実的な流れの部分のみを自立させれば、客観的諸事実に基づく歴史記述に転化しうる内実も備えてきていた。この自立の作業 (=「世俗化」) を遂行したのは啓蒙主義であったが、「19 世紀的普遍史」自身もまた、様々なグラデーションにおいて、客観的諸事実に基づく歴史という色彩を濃厚にしてきていたのである。

## 普遍史と啓蒙主義的世界史との相違

啓蒙主義が歴史学の歴史で果たした役割については、長らく否定的見解が続いていた。ランケ以降のドイツの歴史主義者たちは、啓蒙主義の考え方を「非歴史的」だとして、全否定的な批判を行った。ヨーロッパでも日本でもこれが強い影響を与え、定説的見解となっていたのである。こうした否定的見解を覆す主張が本格化するのには、第二次大戦後になってのことである。再評価の先鞭をつけたのは、ナチス・ドイツからアメリカに亡命したユダヤ系思想家、カッシーラー (Ernst Cassirer, 1874-1945) や、ピーター・ゲイ (Peter Gay, 1923-2015) らである。例えばピーター・ゲイによれば<sup>(28)</sup>、啓蒙主義者たちは「非歴史的」どころか「歴史学を科学にする」(306) ことに取り組んだ、歴史学の変革者であった。そして彼らが聖書に基づくキリスト教的歴史を否定し「世俗化」(312) して史実に基づく歴史に変革したこと、研究対象を拡大して新たな世界史の可能性を開き、また文化史を発見したことを高く評価した。こうした再評価は、ドイツでも、1970 年代に入って大きな議論の末受け容れられるところとなり、その結果、1990 年代以後は動かぬものとなってきている。筆者自身もまたガッテラー (Johann Christoph Gatterer, 1727-99)、シュレーツァー (August Ludwig von Schlözer, 1735-1809) らの「ゲッティンゲン学派」の研究から、同じ結論に達した。だが、これについては、ここでは繰り返さないことにしたい。

ただ、本書のテーマに関わる具体的な事例、「啓蒙主義的教科書」については、そのように判断する場合の指標ないし普遍史との相違について、述べておくべきであろう。筆者はこれまで、世界史記述の種類を、「世界」・「人間」・「時間」の各々の内容の相違によって区分してきた。これを「啓蒙主義的世界史」について当てはめて整理すると、

次のようになろう。

まず「世界（宇宙）」は、普遍史ではもちろん全知全能の神による「創造の奇跡」によるものとされた。啓蒙主義者の多くは理神論者だったから、そこでは、神による「創造」は承認されていた。だが彼らにとって創造されて以後のそれは、もはや、天使や奇跡に満ち、諸霊の住まう惑星や神の座のある至高天などからなる「宇宙」ではない。<sup>ユニヴァース</sup>17世紀の「科学革命」の過程でそれは神秘性を喪失し「世俗化」されて、自然法則に基づいて自己展開を遂げるものとしての「世界」<sup>ワールド</sup>となる。人間の住む空間も、「大航海時代」を通じて、三大陸からなる平円盤状の大地から、四大陸からなる地球へと変貌した。「人間」についても、神の「創造」までは認めても、自然の場合同様に、創造以後の人間の歴史に神が「奇跡（預言）」を通じて直接介入することは否定される。人間界の内容も、「普遍史」が前提としていたキリスト教徒、異教徒、怪物からなる人間界から怪物が消え、ヨーロッパ人、アジア人、野蛮人からなると考えられるようになった。そして、この人間界全体を包摂する、新たな歴史像が求められるようになった。他方で、聖書は、その批判的研究の発展の結果、特定の時代のユダヤ人グループによって書かれた、歴史的諸文書の集成とされるようになる。こうしたことが結びついて、人類史は、神による人類教育の過程ではなく、理性的存在である人間が展開する、人間精神＝文化の進歩の過程とされるようになった。この「進歩史観」は、やがてフランス革命以後の近代化や他の世界の植民地化が進むにつれ、「野蛮人」に対する蔑視、アジア史の特徴を「停滞」とし、ヨーロッパのみが「進歩」を実現したとする考え方立つ、ヨーロッパ中心史観となっていく。

具体的記述の現場では、「人類史の始まり」の部分が、論争の主戦場となった。その結果、アダムから人類史を開始することが否定され、さらには

「神の民」＝ヘブライ人（ユダヤ人）も、神による人類教育を担うという特権的な地位を剥奪されていく。バビロニア人その他の地球上の諸民族を、聖書に書かれている系譜に依拠して位置づける記述などもなくなる。アダムやノアなどの記述にかえ、17世紀に登場してきた「人種論」が冒頭に置かれるようになり、そこでは、ブルーメンバッハ（Johann Friedrich Blumenbach, 1752- 1840）

の五人種論（コーカサス人、モンゴル人、エチオピア人、アメリカ人、マレー人）が大きな影響を与えた。また、「普遍史」では神の与える慈悲あるいは罰の「範例」として、諸国の治乱興廃が記述された。これに対し、「文化史」が登場してそれが占める割合が次第に大きくなる。また人類史が未開・野蛮な先史時代と文明の開始以後の文字史料によって事実が確認できる歴史時代とに大きく区分されるようになり、歴史記述も、文明の成立から開始されるようになる。普遍史の理論的支柱の一つ四世界帝国論も、理論的前提そのものが消滅した。19世紀後半には、アッシリアも伝説や聖書に拠ってではなく発掘と楔形文字の解読に基づく記述の時代に移る<sup>(29)</sup>。また、四世界帝国論に代わって歴史時代全体が古代・中世・近代に三区分され、「中世」には、「暗黒時代」など、否定的評価が与えられる<sup>(30)</sup>。年号も、普遍史の基礎にあった創世紀元からは独立した、「世俗化」ないし「中性化」されたイエス紀元（「イエス前」を含む）のみで表記されるようになる。つまり、始まりと終わりのあるキリスト教的時間にかわり、均一に、無限に流れるニュートン的な「絶対的時間」が置かれ、その目盛りとして、イエス紀元による年号が使用されるようになる。最後に、こうした変化全体を象徴するタイトルとして、「世界史（World History）」が、「普遍史（Universal History）」にかわって選ばれるようになる。そしてこれらの全要素に関して聖書ときっぱりと手を切ることが行



われているものが、最も徹底した「啓蒙主義的世界史」ということになる。

だが、以上は、結果の側から見て整理したものである。現実には、最初はばらばらな形で提出されたものが徐々に結合して、一つの全体像を形成してきたものである。そうした移行の過程にある時代、とりわけ19世紀前半の時代に西欧で書かれた教科書では、普遍史的な要素と啓蒙主義的な要素とが、対立を含みつつ相互に浸透しあっている状況にある。古代以来の長大な歴史を持つ普遍史からの「移行」の時代であるということ、キリスト教徒だった啓蒙主義的歴史家も多かったことを考えると、こうした状況が見られることのほうが、むしろ当たり前と言えよう。以後しばしば「グラデーション」という言葉を使用していくのは、このような微妙な相互浸透の状況が見られるからである。

### 3. 普遍史型万国史教科書とその原典

「学制」下における世界史の教科書では、文部省が刊行した『萬國史畧』（明治7）が、その大きな割合を占めていた。しかし、使用された教科書は、それだけではなかった。次に、「明治十年前後」の頃に「これ〔官版『萬國史畧』〕に次いで多く用いられたと推定できる」<sup>(31)</sup>とされる8点の教科書について、各々の特徴及びその原典の特徴を見ていくことにしたい。

#### 明治10年頃に使用された、他の主な教科書

最初に、その八点を刊行年順に挙げておこう。

1. 西村茂樹編『萬國史略（3巻3冊）』（花雉連書房、明治2）→『校正 萬國史略（10巻11冊）』編纂者蔵版、明治5～9。
2. 箕作麟祥<sup>あきよし</sup>『萬國新史（上、中、下、全18冊）』東京玉山堂、明治4～9。
3. 寺内章<sup>しょうめい</sup>明譯編『五洲紀事（6巻6冊）』韜光

屋所蔵、明治4。

4. 作樂戸痴鶯<sup>さくらどちほう</sup>・秋山政篤・稲垣銀治譯編『萬國通史（3編9冊）』文部省、明治6～9。
5. 西村兼文編輯『外國史略（8巻4冊）』壽楽堂、明治7。
6. 田中義廉<sup>よしかど</sup>『萬國史畧（5巻5冊）』温故堂、明治8。
7. 井出猪之助『萬國畧史（5巻5冊）』浅井吉兵衛（大坂）、明治9。
8. 牧山耕平<sup>バーレー</sup>『巴來萬國史（上下2冊）』文部省、明治9。

「学制」の制定と『史畧』の出版は、明治5年であった。これ以前に出版された寺内章明譯編『五洲紀事』までの3著は、他の5点と違い、元来は一般向けのものが教科書としても使用されたということになる。

全体は、規模の面からは、二つのグループに分けることができる。第一グループは4点から成る。

『萬國新史』は、大ざっぱに字数で比較して、官版『萬國史畧』の5.5倍、西村茂樹『校正 萬國史略』は5.4倍、『巴來萬國史』は5.2倍、最後に『萬國通史』は、4.6倍となる。4点のうち『巴來萬國史』は、原書通りに、全198章のうち中国、日本に合計4章をあてているが、残る3点は、全て西洋史のみである。別に東洋史（中国史）教科書が必要だということである。これに対し『史畧』（4.7万字）と官版『萬國史畧』（4.6万字）は、規模がほぼ同じである。文部省の判断では、実際に授業に使用できるのはこの程度の分量が適切ということだったのではなかろうか。そうした点から見ると、特に箕作麟祥（1846、弘化3-1897）の『萬國新史』は、フランス革命を起点とする、「西洋現代史ともいべき史書」<sup>(32)</sup>である。これでは、現在の感覚では、教科書として位置づけることはできないだろう。残る三点にして

も、かなり詳細なものである。

残りの第二グループ4点のうち、井出猪之助『萬國畧史』は、官版『萬國史畧』の3.5倍くらいといえよう<sup>(33)</sup>。但し本書は、日本史、中国史、西洋史全てを組み込んでいる。他の3点は規模は小さくなって、田中義廉『萬國史畧』が約2倍、『五洲紀事』は1.2倍、『外國史略』が、0.8倍となる。しかしまた、井出以外のこれら三点についても、『五洲紀事』がグッドリッチの中国史を抄訳して挿入しているくらいである。つまり、これら三点の場合も、別に、中国史関係の教科書が不可欠となる。

当時、中国史の教科書として、『十八史略』や『續十八史略』などが使用されていた。新たに編まれたものとして、沖修『繪入 支那國史略』(明治7)や、味岡正義、他『支那史略』(明治11)等があった<sup>(34)</sup>。

万国史の教育が行われた上等小学の授業は、生徒が教科書を事前に読んでくることを前提としていた。従って、ある程度は分量があってもよかったかもしれない。また万国史を学習する12歳まで進んだ生徒は、エリート候補生であった。このことを考えれば、特に第二グループのものについては、教科書として使用することは可能ではあったろう。箕作麟祥の『萬國新史』を除く第一グループのものについては、詳細に過ぎると思うが、不可能ということもないかもしれない。いずれにしろ、これだけの内容を詰め込まされたとしたら、当時の「小学生」たちは本当に大変だったと思う。

#### 西村茂樹とウインネ、タイトラー、ヴェルター

西村茂樹(1828-1902)は40歳のとき佐野藩から派遣されて京都にいたが、1867(慶応3)年の王政復古の直後、新たな歴史書を入手して翻訳を始めた。彼は幼い頃から儒学、次いで佐久間象山から蘭学、手塚律蔵から英語を学んだ。一方、幕府の外交事務を預かるようになった主君堀田正睦

の命でハリスとの外交文書を取り扱うなど、極めて多忙な生活を送ってきた。しかもそうしたなかで、語学力を駆使してオランダ人ウインネの世界史を『百代通覧訳藁』(未刊行)の書名で翻訳していた。このとき入手したのは、上述したタイトラー(Alexander Fraser Tytler, *Lord Woodhouselee* 1747-1813)の『一般史の諸要素・古代と近代』<sup>(35)</sup>で、これを明治2年に『萬國史略』として出版していったことは、上述のとおりである。旺盛な訳業はその後も続き、ヴェルター(Theodor Bernhard Welter, 1796-1872)『世界史教科書』<sup>(36)</sup>をオランダ語訳から重訳し、『泰西史鑑(30巻)』(明治2~14)の名で出版していく。この作業と同時並行的にエマ・ウィラード(Emma Hart Willard, 1787-1870)の『普遍史の体系的展望』<sup>(37)</sup>を『萬國通史』(未刊行)として翻訳したりしながら、未完の『萬國史略』の改訂・増補版である『校正 萬國史略』の著述を進めた<sup>(38)</sup>。このように明治の代表的翻訳家・著述家として活動する一方で、森有礼に協力して明治6年には福沢諭吉、中村正直、加藤弘之、西周、箕作秋坪、箕作麟祥などと「明六社」を結成して中心的役割を果たし、さらに同年には森有礼の勧めで文部省編書課長になった。彼は文部省内守旧派に属し、そのため河野文部卿の時に一時文部省を離れることもあったが、その後復帰し、長らく文部省で教科書の編集や儒学を基礎とする道德教育の推進などに力を尽くしている。

『校正 萬國史略』(明治5~明治9)の「例言」で、彼は、原書はタイトラーのものだが、しかし簡潔で初学者には難しいので、他に、アイルランド人テイラー、アメリカ人エマ・ウィラード、オランダ人ウインネの諸著も利用して初学者用に平易に記述したと述べている。

タイトラーの紹介に入る前に、最初にウインネ(Jan Adam Wijnne, 1822-99)について述べてお

きたい。彼の『一般史概説』<sup>(39)</sup>は、オランダでは大変人気の高かったギムナジウム向け教科書であった。その序文で、彼は天地創造をキリスト前四〇〇〇年頃に置く創生紀元に関して議論している。そして旧約聖書とはいっても、ヘブライ語とサマリタン版とで示す年数が異なることを指摘してこれを「極めて不確実」と断じ、結局、創世紀元は使用しないで、キリスト紀元の年号のみを採用している。序文の次に置いた小項目「先史時代」では、「人類は中央アジアに居住していたアダムとエヴァという一組の夫婦の子孫である」という表現も見られる。しかし、これは「モーセの物語の拠れば」という限定つきでの言葉であり、しかも、直ちにブルーメンバッハに拠る五人種の説明に移り、天地創造やノアの大洪水、セム・ハム・ヤペテなどには、一切触れない。それどころか、通常考えられている人類の歩みとして、採集生活を出発点とし、狩猟・漁労、遊牧、農耕の段階を経て国家（＝文明）段階への「進歩」を描いている。本文を中国文明の記述から開始し、全体を、古代（～476）・中世（～1500）・近代に時代区分して文明史的世界史を記述していく。「イスラエル人」の記述でもアダムやノアとの関係には一切触れず、ブラハム以後の歴史を記述するのみである。このような内容から、これを啓蒙主義的世界史とすることができよう。上述のように西村茂樹はウインネ『一般史概説』の訳稿『百代通覧訳藁』を残しているからその立場は知悉しているはずなのだが、しかし『校正 萬國史略』を天地創造に関する記述から開始している。つまり、歴史時代の諸事件に関して参照はしたかもしれないが、ウインネのこの基本的立場を、彼は受け容れてはいない（テラーに対しても、その啓蒙主義的立場を継承しないことは同様である。なお、テラーとエマ・ウィラードについては後述する）。

『校正 萬國史略』で西村茂樹が最も多く依拠

したのは、本人も言うとおり、タイトラーの『一般史の諸要素・古代と近代』であった。タイトラーの最大の特徴は、その記述に於いては、啓蒙主義的要素と普遍史的要素とがせめぎ合っているということである。まず啓蒙主義的要素としては、タイトルを「普遍史」ではなく「一般史」としている。歴史学の目的を「人類の状態に関する進歩の展望を示す」ことに置き（序論）、歴史学を思弁ではなく諸事実の因果的関係の追求に基づく科学とし、市民にとっての歴史の有用性を主張している。つまり進歩史観、聖書ではなく事実に基づく世界史、市民の自己啓蒙のための歴史の主張が行われている。また「ユダヤ人の歴史は大学教育では異なる分野に属するので、この講義の計画には組み込まれていない」（5）として記述しない。また大洪水以前の世界についても「事実というよりは理論の問題なので、それらは殆ど歴史の領域には含まれない」（11）と述べて、天地創造から記述するという普遍史の作法も採用しない。1783年に「エディンバラ王立教会」が創立されたが、創立者にはアダム・スミス、炭酸ガスの発見などで有名な化学者ブラック、岩石の火成論で名高い地質学者ハットンなど、いわゆるスコットランド啓蒙運動の推進者たちが名を連ねており、タイトラーも、その一人であった。こうした側面から言えば、彼自身は啓蒙主義者の一員と言ってよいであろう。

だがもう一方で、彼の歴史書については、そうはい言いきれないところがある。なによりも、「この普遍史の展望において記述されている年代学は、アッシャー大監督のものである」（10）と言っている。カリキュラム上の「普遍史」を担当していたからここでは本書を「この普遍史」と呼んだのかもしれないが、しかし、なぜタイトルの「一般史」という言葉をここでは使用しなかったのだろうか。しかも本書の巻末に置かれた年表（この年表を独立させ、西村茂樹は明治4年に『西史年表（三冊）』

として出版している)では、前 4004 年の天地創造を冒頭に置いている。グッドリッチやエマ・ウィラード、ヴェルターなどと同様、アッシャーの聖書年代学に従って世界史を見ているのである。実際の記述でも、「大洪水直後の時代についてはモーセの諸書が最古で唯一の確かな歴史を提供している」(11)とし、大洪水後の時代については聖書を復権させ、「大洪水の約 150 年後に、ハムの孫ニムロデ(異教徒歴史家の言うベルス)」が「ユーフラテス河岸にバビロンを建設した」(同)と述べている。「そしてセムの息子でノアの孫のアシュルが、ティグリス河岸にニネヴェを建設したが、それはアッシリアの首都となった」(11 以下)と言い、続いてアッシリア史へと進んでいく。本文では 800 年間の「伝説のアッシリア」を記述し、巻末の年表には、「聖書のアッシリア」が記述されている。このように、年代的枠組みだけでなく、ノア(大洪水)以後については、聖書に基づく記述が行われている。年代学を中心に、まだ普遍史的要素も本質的な意味を保持しているのである。

本書は初版が 1801 年だが、この初版を南塚信吾氏は、普遍史から近代的世界史への「過渡的」<sup>(40)</sup>な性格のものと位置づけておられる。本書は彼の死(1813)の後も世紀末近くまで何度も改訂・出版されていくのだが、しかし、同氏によればその過程で性格が様々に変化した。1834 年版が古代と中世に関しては「聖書的なものに『逆行』した」(331)。一方、1847 版は、「徹底して脱聖書を目指し」、「脱神学的で、近代の実証的な方法に通じるもの」(330)になっているという。だがその後はまた元に戻り、筆者が利用した 1873 年版は、上述のように、生前に彼が出版したものと同じ性格のものとなっている。彼の死後に本書が辿ったジグザグな動きは、最終的には、その都度の編集者の意識の反映なのではあろう。だがそうしたことが生起したのは、彼の史書が一步前に進めば近代

的歴史に属するものとなるが、逆のほうにぶれば聖書的色彩の濃厚なものになるという、きわどい位置にあったことに起因している。

筆者は、上述した両要素のせめぎ合いの観察から、なお片足の一部を聖書に置いている点でそれは「19 世紀的普遍史」に属するものであり、啓蒙主義的世界史への完全移行のほとんど間際に位置するという意味で、「過渡的」な位置にあるものだったと考える。だが、本書が出版されたのは 19 世紀初頭、アメリカのグッドリッチやエマ・ウィラードなどよりずっと以前のことである。このような早い時点でこのような性格を有する本書をタイトラーが編んだ原因は、彼自身が「スコットランド啓蒙」の流れを担う一人だったことに求めることができよう。イギリスでは啓蒙主義的歴史学の開拓者として、通常はヒュームの『英国史』(1757-62)とギボンの『ローマ帝国衰亡史』(1776-88)が挙げられる。ここから始まった歴史学の変革に、世界史記述あるいは教科書の世界でいち早く取り組んだ一人がタイトラーだったと言える。彼の半世紀後にイギリスで書かれたホワイトの教科書ですら、後述するようになお「19 世紀的普遍史」であった。こうしたことを考えれば、先頭を切って新しい世界史記述に取り組んだ彼の教科書がなお後ろ足の一部を普遍史の世界に置いたものとなったのも、やむを得なかったと言えるのではないであろうか。それほどに、「普遍史」の伝統は強力だったのである。

さて、『校正 萬國史略』は、具体的記述はタイトラーを基本としてはいても、枠組みや重要な要素で、西村茂樹が他の諸著作から取り入れているものがある。まず時代区分がその一例である。タイトラーの場合は、ローマの滅亡によって「古代」と「近代」に区分しているだけである。「中世」を設定していないのは、シュレーツァーの古代・中世・近代という世界史の時代区分が、まだ彼には

届いていなかったことを示していよう。これに対し西村茂樹は、ヴェルターまたはウインネによって補完し、全体を「上古」、「中古」、「近世」に時代区分して、アダムから1871年のドイツ統一までを記述している。また、「上古」については、タイトラーが大洪水以前の記述を拒否しているのに対し、彼はアダムから開始することで、ここではむしろ伝統的普遍史のほうを採用している。もっとも、彼は、キリスト教の神を受け容れているわけではない。天地創造については、以下のように記されている。

西國ノ古史ニ曰ク、天地未ダ成ラザルノ前、  
靈妙不測ノ上帝アリテ、僅カ五日ノ間ニ天地萬  
物ヲ造リ、第六日ニ至リ、己ガ形ニ象ドリテ人  
ヲ造リ、以テ海魚飛鳥昆蟲ヲ統轄セシム、其人  
ヲ名ケテ<sup>アダム</sup>亜當トイフ、又婦人ヲ造リ、之を<sup>エワ</sup>夏娃ト  
名ケ、以テ<sup>エワ</sup>亜當に配セシム。是ヲ人類ノ始祖ト  
為ス、

彼は、「神」を「上帝」と訳している。明治政府がキリスト教禁制の高札を撤去したのは1873（明治6）であり、彼がタイトラーの訳業を開始した頃は、まだキリスト教が禁教とされていた時代である。しかしそうしたなかでも、キリスト教に関する情報や関係文書に触れることは不可能ではなかった。新井白石が既に、マテオ・リッチが“God”を「上帝」と訳していたことを知っていた。『西洋紀聞』に「利瑪竇〔マテオ・リッチ〕初に天主の字を借り用いて、その蛮語〔デウス〕を譯し、つゝに其説を附會して、經にいわゆる上帝これ也とす」<sup>(41)</sup>と記しているからである。山村才助（昌永、1770-1807）の『西洋雜記』（1801、出版は1848、嘉永1）については後述するが、彼以後、途切れ途切れの細流ではあるにしてもキリスト教的世界史（普遍史）紹介の流れも続いていた。

公刊書以外でも、禁書であった明や清の時代の天主教関係文書も読まれていた。復古神道で著名な平田篤胤の場合がその一例である<sup>(42)</sup>。カトリックは、その後、「天主」に統一する。他方、中国のプロテスタント宣教師の間でこれを「神」と訳すか「上帝」と訳すかで大問題となったものの、決着がつかなかった。こうした情報も、西村には入っていたかもしれない<sup>(43)</sup>。

西村自身が接した原典のうち、神による天地創造などの記述は、タイトラーにはないものの、エマ・ウィラードやヴェルター等には存在する。従って、これらで聖書の記述に直面していたことは間違いない。一方、「上帝」という語は、『詩経』や『書経』にも出てくる言葉である。深い漢学の素養を有していた彼が、そこで出会った“God”を独自に「上帝」と訳したと考えても、無理な推測ではないようにも思われる。そしてこの最後の推測が真相に近いとも思われるのだが、残念ながら、西村茂樹の使用した「上帝」の由来の究明は、今後の課題として残しておくしかない<sup>(44)</sup>。

これに続く「上古」の部分は、タイトラーが述べる通りに記述されている。つまりニムロデを祖とするバビロニア、アッシリア（ニヌス～サルダナパルス）へ進み、その滅亡後の新バビロニア（ネブカドネザルなど）と新アッシリア（ティグラトピルセルなど）、続いてメディア、エジプト、ギリシア、ローマについて記述していく。西ローマ帝国滅亡以後はタイトラーの「近代」をさらに「中古」と「近世」（アメリカ発見以後）に二分し、同時代における諸国の状況を並列的に記述している。「中古」と「近世」についてはさらに時代を細分していくが、この細かい年代の区分のほうは、概ねタイトラーに従っている。「フランス革命」（彼はこの語を使用しているが、二月革命は「一八四八年の動乱」と呼んでいる）については、タイトラーの生前に出版された第5版（1812）まではフ

ランス革命は扱っていない。没後に出版されたものにはフランス革命の記述が補填されているが<sup>(45)</sup>、それがタイトラー自身の残したものによるのか編集者のものかは定かではない。また、西村茂樹のフランス革命の記述も誰に依拠しているのか特定は出来ないが、具体的には、「自主の説を主張」(1)したモンテスキュー、「ルーソー」、「ウォルテール」から始まり、「全国の大集会」(三部会、3)以後「法國ノ暴威政治」(恐怖政治、12)に至るまで、重要事件はほぼ網羅して記述している。但し人権宣言に触れていない。革命の評価については、「其説殊ニ狂暴」(7)という山岳派(ロベスピエール)に対する厳しい批判的表現以外は見当たらない<sup>(46)</sup>。

タイトラーは、各国史をローマ滅亡以後国毎に現在まで一気に追ったり、そのような各国史を併置するといった、『パーレー萬國史』のような形式は採用していない。逆に、各国史は各期毎に(時間で)分断されて記述されている。筆者から見れば、『パーレー萬國史』は、その構成からいってこれを「万国史」と訳すのは自然なことにも思える。だがタイトラーのほうからは、個別国家よりは「時代」のほうを意識するのが自然である。もちろん各期はほとんど国単位で記述されているから、国毎に読み継ぐという作業を行えば、現在まで各国史が追跡できるとはいえる。西村茂樹は、こうしたことがありながらも、タイトラーの書を訳すに当たって、『萬國史略』、『校正 萬國史略』というタイトルを与えた。これは、幕末から明治初期においては、それほどに、国民国家の集合体としての西欧の姿が、強いインパクトを与えていたということなのであろう。そして西村茂樹が与えた『萬國史略』、『校正 萬國史略』というタイトル名は、その結果、以後の万国史盛行の契機になったのであろう。いずれにしろそれは、アダムから筆を起こした歴史書という点で、官版『萬國史畧』(＝グッドリッチ)と共通の性格を有していた。全体と

して見れば、『校正 萬國史略』は、「19世紀的普遍史」の一形態(タイトラーの普遍史)を基礎とした、「普遍史型万国史」となっているのである。

西村茂樹が明言しないものの『校正 萬國史略』の執筆では参照していたはずのヴェルター『世界史教科書』と、彼自身がそれを翻訳した『泰西史鑑』についても、簡単に紹介しておきたい。後述するが、これが大坂中学で教科書とされるという事情があるからである。ヴェルター『世界史教科書』は、出版後半世紀以上もの間ドイツで使用された、大変に人気の高い教科書であった。その初版が出版された1826年の当時は、「ゲッティンゲン学派」の啓蒙主義歴史学が、ドイツの歴史学をリードしていた。ヴェルターの教科書の新しい特徴は、そうした時代を反映して、シュレーツァーが鍛えあげた世界史の時代区分、古代・中世・近代(フランス革命以後を「現代」)の三区分を採用していることである。「世界史」のタイトルを持つことやこの点から、それは啓蒙主義的世界史であるかのように見える。しかし、新しいのはそこまでであった。特に「古代」(天地創造～476年のローマ帝国滅亡)の記述内容は、伝統的な普遍史そのものである。シュレーツァーもアダムから記述を開始したが、それは、「寓話・伝説的時代」と限定してのことである。そして「歴史時代」を設定して事実に基づく歴史が可能なのは文明の開始以後の時代＝歴史時代のみとし、文明の進歩の過程として世界史を構想したのであった。これに対しヴェルターは、前4000年頃の天地(アダム)の創造からアダムの930年の寿命、ノアの大洪水などを全て歴史的事実とし、また、新・旧二度にわたるアッシリア帝国を記述している。中世(476～1492年のコロンブスのアメリカ発見)と近代についても、ルターの宗教改革を高く評価し、神聖ローマ帝国を中心に歴史を記述するなど、「厳格なルター主義と王制主義の立場」<sup>(47)</sup>で書かれている。

それは、『パーレー萬國史』よりずっとプロテスタント的普遍史の原型に近い、古いタイプの「19世紀的普遍史」であった。

『泰西史鑑』（明治2・14）<sup>(48)</sup>は、目次については原著（ヴェルター）のものを統合したりして原著よりやや少なくし、順序も入れ替えている。しかし時代区分はヴェルターの通りに上古・中古・近古・近世に区分しているし、編集の基本は同一である。原文の膨大さを反映した大著になっており、古代から近代に至る政治史に関しては、極めて詳細な記述となっている。もっとも、ここではその詳細は紹介する必要はなく、「上古」において頻出する原書の「神」が、全て『校正 萬國史略』同様に「上帝」と訳されていることを言っておけばよいだろう。例えば上編第一巻冒頭は、次のようである。

聖經ノ一書ハ、聖學ニ志ス者ノ、最モ尊信崇重セザルベカラサルノ書ナリ、世界開闢ノ事ヲ記スル者、是ヲ舎テ、他ニ求ムベキ者ナシ、…其書ニ曰ク、上帝…僅カ六日ニシテ、世界ヲ造成セリ、其第六日ニ於テ、己ガ形体ニ象ドリテ人ヲ造リ、「是ヲ以テ、水中ノ魚、空中ノ鳥、原野ノ獸、及ビ全大地ヲ統宰セシム」、上帝此人ニ名ヲ命ジテ<sup>アダム</sup>亜當ト云フ、「地上ノ人ト云ル義ナリ」、又一女ヲ造リ、<sup>エフハ</sup>夏娃ト名ケ、以テ亜當ニ配セシム（「」内は原文になく、西村茂樹の挿入文である）、

所々抄訳となっていたり、このように説明文が挿入されたりしているが、全体は、概ね原文に即したものだと言ってよいと思う。また、翻訳したヴェルターの教科書が「19世紀的普遍史」だったから、『泰西史鑑』も、『校正 萬國史略』同様の「普遍史型万国史」となっている。

## 『パーレー萬國史』の役割の大きさ

先に挙げた八点に『史畧』、官版『萬國史畧』を加えて全体を眺めたとき、明治10年前後の万国史教科書の世界で特に目立つのは、グッドリッチの『パーレー萬國史』が果たしている大きな役割である。『史畧』と官版『萬國史畧』については既に述べたが、本書の全訳や抄訳以外にも、何らかの形でこれに依拠していることを指摘出来るものが多いからである。

まず、<sup>パーレー</sup>牧山耕平『巴來萬國史』は、原文に忠実な全訳書である。牧山耕平（?-?）は箕作麟祥の家塾で学び、明治4年に文部省の編輯寮に入っているが、詳しい経歴は不明である。本書は、『パーレー萬國史』が英語の教科書として広く使用されていた状況に鑑み、「幼童ヲシテ原書ヲ讀ムノ参考ニ供セイシメン」（凡例）との目的で翻訳されたものである。このため、「勉メテ原文ニ沿ル」という原則の上で、翻訳が行われている。

寺内章明も文部省編輯寮で牧山耕平とともに翻訳活動に従事した人だが、その『五洲紀事』は、「小序」で、『パーレー萬國史』を「譯編」したものと明示している。実際にも、やや詳細な抄訳となっている。「五洲記事」という書名もグッドリッチが五大洲（＝五洲）に分けて記述した構成から採っており、構成も、官版『萬國史畧』と同じである。

田中義廉（1841、天保12-1879）の『萬國史畧』についても、同じことが言える。彼は明治5年に大槻修二とともに文部省に入省して教科書編集に携わった洋学者である。当然、同じ明治5年に入省してきたその弟、大槻文彦の官版『萬國史畧』への取り組みについてもよく知っていたであろう。田中義廉自身については明治6年に文部省から刊行された『小学讀本』が特に有名であるが、他に日本史の教科書も執筆している。彼は『萬國史畧』の凡例では「彼此を抄譯」したと記すのみで原著を明らかにしていないが、本書もまた、主として

グッドリッチに基づいているのである。本書には官版『萬國史畧』にはない「アラビア國」という節があることが、その一証拠である。というのは、これは『パーレー萬國史』のアジア洲の第32章、「アラブ人の起原、マホメット教の成立」を基にしているからである(表1・5参照)。官版『萬國史畧』のほうはその内容を「アジア・トルキ」の章に編入して述べていて、この章は独立させていない(表1・4)。これに対し、「アラビア國」は、この章を原書通りに残しているのである。また本書は巻之一でローマ滅亡までを扱い、続く四冊(巻之二～巻之五)は全て西欧各国史である。分量は、官版『萬國史畧』のヨーロッパ史の部分だけと比較すると、2.4倍となる。構成面では、第一冊で上の「アラビア國」のほか「メジャ国(メディア)」と「新アッシリア国」の節が設けられている点で官版『萬國史畧』と異なるが、他は同じである。主要な違いは、西欧各国史の部分をずっと詳細にしたところにあると言える。本書と官版『萬國史畧』とは、編集の仕方には多少の違いがあるにしろ、基本的にグッドリッチの『パーレー萬國史』に拠っている点は同様なのである。

最後に西村兼文(1832、天保3-1896)の『外国史略』は、アダムから1872年の岩倉使節団のサンフランシスコ到着までを、年表形式で記述しているものである。内容は、古代では国ごとにまとめて記述するよう努めているものの、近代では、各国の政治や文化などの事件が混在する形で記述されている。年表である以上はこうした形式になるのは必定だが、教科書として使用するのには、筆者の感想では、やや厄介なように思う。依拠した外国歴史書については明示されていないが、『パーレー萬國史』自体か、或いはこれを利用した諸著に一部依拠していることまでは指摘できる。というのは、例えば本書にある「アダムとイワなる二人の男女初めてアジアの西陲<sup>せいすい</sup>に降生し、ユフレート

河<sup>ひん</sup>に濱したるイデンの園圃に住し、自ら夫婦となる。此子孫遂に繁殖して、全く人類の源を為せり」という文章は、実は、寺内章明が『五洲紀事』でグッドリッチの第7章を訳した文章をほとんどそのまま流用したものだからである。

### 井出猪之助とエマ・ウィラード

井出猪之助(1846、弘化3-1915)は備後福山藩士の家に生まれ、鳥羽伏見の戦いで敗れた後、脱藩して上野の寛永寺で徳川慶喜の護衛隊に入隊している。しかし福山藩の命で国に戻されて閉門謹慎の処分を受けた。名誉回復のため函館戦に福山藩軍の一員となって参加したが、戦争後は帰郷せず東京で大学南校に入学し(明治2~4)、慶應義塾を経て官立東京師範学校に進んだ。卒業して以後は、官立大阪師範学校の教師(明治6)を皮切りに、奈良師範学校長、府立大阪師範学校長などをつとめ、晩年は郷里の福山中学校で教鞭を執るなど、一貫して教育者として活動している。若くして国学、漢学を修め、また大学南校以後は英学を修めており、その広い教養を活かして、多くの版を重ねた『萬國地誌畧』(龍章堂蔵版、明治8)や、『小学会話之捷徑』(文敬堂梓、明治7)など、種々の教科書を執筆している。『萬國畧史』もその一つであり、師範学校の校則では、本書を上等小学校で「読物」として使用することが定められていたと紹介されている<sup>(49)</sup>。

本書の特徴は、「凡例」によれば三点ある。第一は、「原本ハ、米利堅人オマキラード氏之著ス所ノ萬國史」だということである(グッドリッチ、ウィルソン、ホワイトも「抄訳」したと付け加えている)。第二は、日本史と中国史については「古來傳フル諸史ヨリ其概略ヲ採用シ原本ノ遺漏ヲ増補」したことである。第三は、「神武天皇即位辛酉ノ年ヲ紀元」として年号を記していることである。「オマキラード」の原本はもちろんキリスト紀元の年号を記しているが、全て神武紀元の年号に換



算している。

彼が原本としたのは、著名なアメリカの女性教育家エマ・ウィラード (Emma Hart Willard, 1787-1870) の諸教科書のうち、『普遍史の体系的展望』である。これと『萬國畧史』の古代 (=「上古」) の指標となる事件が、「神武紀元一」を除いて、一致しているからである。

## 〈『普遍史の体系的展望』の「古代」〉

- ⇨ 〈『萬國畧史』の「上古」〉
- 第一期 天地創造 ~ アブラハムの召命  
前四〇〇四年  
⇨ 上古史 一; 人類ノ始 ~ 〃  
前三三四二年
- 第二期 アブラハムの召命 ~ 出エジプト・  
前一九二一年  
十戒 ⇨ 上古史 二; 〃 ~ 〃  
前一二六一年
- 第三期 出エジプト、十戒 ~ ソロモンの死  
前四九一年  
⇨ 上古史 三; 〃 ~ 〃  
前八三一年
- 第四期 ソロモンの死 ~ ローマ建国  
前三八〇年  
⇨ 上古史 四; 〃 ~ 神武紀元1  
前三二〇年
- 第五期 ローマ建国 ~ アレクサンダー大王  
前七五二年  
の死 ⇨ 上古史 五; 神武紀元一 ~ 〃  
前三二三年
- 第六期 アレクサンダー大王の死 ~ キリス  
前四年  
ト降誕・ローマ帝国への移行  
三七一年 七三〇年  
⇨ 上古史 六; 〃 ~ ローマ帝国  
への移行

(※『萬國畧史』の年号は神武紀元のもの)

『萬國畧史』は中国史、日本史を含んでいるという点で、『史畧』型の教科書である。冒頭の「人類ノ始」は次のように始められている。

紀元前三千三百四十二年、上帝造化ノ妙カヲ以テ、僅カ六日ニ世界及ヒ其間ニ備具スル萬物ヲ造リ、其第六日ニ至リ、人ヲ造リ、而シテ萬物ヲ統管セシム、其人ヲ名ツケテ、<sup>アダム</sup>亜當ト云フ、また<sup>イブ</sup>亜當ノ筋骨一箇ヲ取り一婦人ヲ造リ、名ツケテ夏娃トイフ、<sup>イブ</sup>亜當ニ與ヘテ妻ト為サシム、是人類ノ始

ナリ、

すなわち、エマ・ウィラードに従って天地創造からアダム、エヴァの創造が語られ、「前一千六百八十八年」の「大洪水」、ノアの息子たち、セム、ハム、ヤペテの子孫たちの各地への「遷移」等々の歴史が語られている。一方、上の時代区分では表面に現れていないが、「上古史一 第二章 支那史」から、中国史が開始される。「紀元前凡三千年」の太昊伏羲 (人首蛇身、八卦、在位百十五年等々) 以後、三皇五帝を経て「夏」の途中、「少康」までが語られる。「夏」の記述が途中で切られているのは、「上古史一」の下限を、エマ・ウィラードに従って聖書によるアブラハムの召命の年 = 「紀元前一千二百六十一年」に合致させたからである。全ての年号は神武紀元で記されているが、このように、人類史と時代区分全体を規定しているのは西洋史 (=聖書) である。

日本史は「上古史 五」の「第一章 大日本史一」から開始される。冒頭で「元年辛酉、春正月、庚辰、神武天皇大和ノ國橿原ノ宮ニ即位ス」と述べるが、遡って高千穂の宮を出発するところから説明している。しかし、神々については語らないで、以後の諸天皇の記述へと移っている。そしてこの時代以後は、各年代枠毎に、その時代における中国史、日本史、西洋史が、語られていく。『史畧』同様に中国史は王朝史、日本史は歴代天皇史であるが、頁数が多くなっただけ、内容はずっと詳細になっている。

ただ、実際に読んでみると、この「上古」では時代枠がこまめに設定されており、それだけ余計に、まとまりを欠くことになっている。本書は、エマ・ウィラードに従って、アブラハムからキリスト降誕までを六期に区分している。もちろん、彼女が依拠した伝統的歴史記述では、グッドリッチの所でも述べたように、古代史を規定している

のは「神の民」の歴史である。しかし例えばアウグスティヌスは、アブラハムの誕生からイエス生誕までの期間をダビデ、バビロン捕囚によって三期に分けただけである。しかし彼女は出エジプト、ソロモンの死、ローマ建国、アレクサンダー大王の死などを画期として、六期に区分している。そしてそれにより、アッシリアやペルシア等の重要な国々の歴史が、不必要なまでにいくつもの時代に分断されてしまうという結果になっている。これに従っている『萬國畧史』でも、例えばギリシア史などは、「上古の二」で登場して以後、ローマの属州になってその古代史を終えるまでが、五カ所に分けて記述される。西洋史のみならず、それでも、まだ、何とか収まりがつくかもしれない。しかし『萬國畧史』には、さらに日本史と中国史の記述が加わっているのである。日本史は歴代天皇史だから時間枠との衝突はあまりないにしても、殷、周等々の中国の諸王朝が、イスラエル（ユダヤ）人の歴史の時代枠にうまく対応などしているわけがない。そのために中国史は一つの王朝を二つの時代に振り分けて記述することを余儀なくされるなど、かえって大変煩雑になっている。筆者の印象では、教科書としては使いにくかったのではないだろうか。

本書の原典となったエマ・ウィラードの『普遍史の体系的展望』は、どのような性格の教科書だったのだろうか。本書は、一見、全時代を古代、中世、近代に三区区分し、年号もキリスト紀元で記しているように見える。だが、彼女の「中世」は、キリスト降誕（＝ローマの帝政期への移行）から1492年までである。つまり、啓蒙主義の三区区分とは違い、彼女の古代は旧約時代であり、中世と近代とはつながって新約時代となっている。「中世」と「近代」はこの新約時代の下位区分に他ならならず、一見「三区区分」に見えるが、実際は普遍史的時代区分に他ならないのである。またその年号も、

『パーレー萬國史』同様、アッシャーの聖書年代学に基づいている。古代を前4004年の天地創造から始めているからである。他の内容でも、アダムをはじめとする父祖たちの長寿も全て事実としているし、古代の諸段階をイスラエル人の歴史を基礎に定めるという「作法」だけでなく、古代史を構成する諸要素やその順序も、普遍史の作法に忠実である。すなわち、ニムロデが建設したバビロン、ノアの孫アシュルを祖とするアッシリア、アッシリアについては第一のアッシリアとそれが滅亡した後の新アッシリア、新バビロニア、ハムの子孫メネスを祖とするエジプト、これに続けてフェニキア史、ペルシア史、ギリシア史、最後にローマ史を語っている。

とはいえ、ただ古いだけというわけでもない。例えば、ノアが、ハム（＝アフリカ人の祖）への怒りから、その息子カナンを呪った事件が、聖書（創世記9－20～27）の通りに記述されている。ノアはそこで「神はヤペテを大いならしめ、セムの天幕に彼を住まわせられるように。カナンはそのしもべとなれ」と呪ったのだが、彼女は、この呪い（＝預言）の通り、「コーカサス人種は、その進歩の過程でアジアとアメリカのモンゴル人種の居住地の大部分を征服してきたし、一方、黒人種は、その兄弟たちによって隷属状態に置かれてきた」（12）と述べている。これは19世紀の時事的問題を頭に置いた記述である。当時西欧では、奴隷制度の廃止を巡って大きな議論が起こっていた。そこでは、聖書のこの部分が、奴隷制擁護論者の主張の正当化に一役買っていたのである。つまりエマ・ウィラードは、このように言うことで、ヤペテの子孫である「コーカサス人種」がアジア（＝セム人）を支配することだけでなく、ハムの子孫である黒人を奴隷として使用することも聖書の預言に依拠して擁護したことになる。

フランス革命に関する記述では、ラ・ファイエ

ットに関する記述から、彼女は、立憲王政派を評価しているようである。また、とりわけ「極悪非道な男」、「残虐な怪物」(339) ロベスピエールが激しく弾劾されている。「恐怖政治」のもとで、「狂気が最高度の野蛮となった。淫蕩と放蕩とが表面に顕れてきて宗教の外形すら破壊された」(338)等々、口を極めて批判されている。その理由は、革命暦が施行されて安息日が廃止され、さらには「理性の女神が裸の売春婦の姿で」(339)表現され、しかもその像がパリ中を引き回され、そのパレードには国民公会のメンバーたちまで参加したからである。こうした批判の激しさは、彼女の場合、特に際立っている。だがそれは、本書が『パーレー萬國史』とほぼ同時期の、19世紀前半に書かれたこととも関係していよう。即ち、当時のアメリカの思想状況を反映して、キリスト教的観念が本書とそのフランス革命観を支配していたのである。『パーレー萬國史』と彼女のフランス革命観を性急に一般化することは慎むべきかもしれないにしても、このフランス革命観は、以後のアメリカの教科書の基礎となっていって考えてもよさそうである。というのは、アメリカ独立革命の与えたフランス革命への影響、ルイ 16 世への同情、民衆の野蛮な行動と「血に飢えた山岳派」(337)に対する批判、さらに「革命暦」における安息日の廃止や「理性の祭典」の批判と結合したロベスピエール弾劾等の諸要素は、以後、同じキリスト教的観点を柱とするウィルソンはもちろん、19世紀後半の啓蒙主義的世界史の記述者フィッシャーやスウィントンにも引き継がれているからである。

本書の性格は、こうして、タイトルから見ても、また上述したような古代史を基礎に 19 世紀に至る西欧各国史を記述しているという意味でも、さらにはまた、人種論に依拠して植民地化や奴隷制度をめぐる問題を議論する際や、フランス革命を批判する際に、キリスト教的観点や聖書が大きな

役割を果たしているという点からも、「19 世紀的普遍史」に他ならなかったと言える。しかもそれは、ヴェルターほどではないにしても、そのグラデーションにおいてグッドリッチや次に述べるホワイトなどに比して遙かに伝統的普遍史に近いところに位置する、「19 世紀的普遍史」であった。

#### さくらどちほう 作樂戸痴鶯とホワイト

ここまで見てきた諸教科書に対し、作樂戸痴鶯他譯編『萬國通史』は、趣が異なっている。理由は、翻訳者のキリスト教に対する態度がこれまでのものと違い、しかも原書であるホワイト『普遍史概説』も、これまで紹介したものとやや異なる性格を有していることに求められよう。ホワイト (Henry White, 1812-1880) はケンブリッジとハイデルベルクの大学で学んだ後、王立協会で論文編集誌の責任者を務め、かたわら、何点もの教科書なども著したイギリスの歴史学者である。本書は、経歴からも推定できるように、ドイツ啓蒙主義歴史学から学んでいると思われる内容を多く含んでいるのである。

『萬國通史』の訳者の筆頭に名がある「作樂戸痴鶯」は本名が山内徳三郎 (1844-1924)、もとは京都の幕臣だった。実名で『西洋英傑傳』も出版しており、これも、『文部省第三年報』では小学校教科書の一例として挙げられている。山内提雲 (八幡製鉄所初代長官) と山内作左右衛門 (資生堂創設者) らの弟であり、維新の動乱時は会津地方を幕臣として転戦していたという。洋学の俊秀としてつとに有名だったため、明治 5 年から開拓使御用掛 (翻訳方) として招聘され、お雇い外国人ライマンの下で活動した。その後は、石炭産業の発展に尽くしている。この間、優れた語学力から通訳や翻訳者としても多岐にわたる活動を行っており、本書もそうした仕事の一環だったのであろう。

『萬國通史』は、序文で、原書は「一千八百七十年刊行英國保維多氏」の書だとしている。書名

が記載されていないため彼の別の教科書を推定する議論もあるが、記述の対応関係から見て、筆者は『普遍史概説』だと考える<sup>(50)</sup>。

原書は「序論、人種」で人種論を述べた後、第一章 聖史 (Sacred History) を「最初の間であるアダムの創出によって完成をみる天地創造は、キリスト生誕前およそ 4004 年前の頃に行われたと考えられている」(13) と書き起こしている。続いて楽園追放、ノアの大洪水、アブラハムから紀元 70 年のイエルサレム陥落に至るユダヤ人の歴史を記述し、イエルサレム陥落については、「これ以後ユダヤ人は、今日もそうであるような、地に散らされた放浪の民となった」(37) と述べている。天地創造、アダムに始まり、ユダヤ人の「ディアスポラ離散」までの歴史を冒頭に置いているのは、何度も言うように、普遍史の「作法」に従っているのがある。

これに対して『万国通史』は、序論の人種論を訳出した後、一応、原書通りに第一篇「神聖史」を設けてはいる。だが、原書の記述の翻訳はしない。かわりに、「此編は世界開闢の事より紀元前七十年<sup>ヂエルセルム</sup>耶路撒冷城の滅亡に終れり」と、その全体を僅か一文で要約し（「紀元前七十年」としているのは、上の紹介のように原著は「紀元 70 年」としているから勘違いだろう）、続いて「全編經典の旨を追ひ専ら彼が宗教に係わるか故に其憚少からず且怪奇虚誕の説誌すに煩き者多きを以て原書の例に違ひ此には之を省略せり」と述べ、これらのたった三行のみで、第一篇を閉じてしまうのである。天地創造やノアの大洪水などの記述を「怪奇虚誕の説」として翻訳することすら拒否し、そのうえで、原書「第二章 東方諸帝国の歴史」を「第二篇 東方國史」とし、以後は、最終章の近代史第四篇第三章、「輓近歐洲動亂の事を記す」に至るまで、原典に従って翻訳を行っていくのである。

ホワイトの原書は、一方で、歴史記述の冒頭に天地創造以後の「神の民」の歴史を置き、それを

物差しとしながら、古代全体を記述している。エジプト、アッシリア、バビロニアからメディア、リュディアを経てペルシア帝国、そしてギリシア史、ローマ史を記述している（フェニキアについては項目が立てられていない）。年号も、アッシヤーの聖書年代学に基づいている。タイトルから言っても、こうした基礎的枠組みを持つことからいっても、本書は、紛れもなく「19 世紀的普遍史」に属している。

しかし他方では、19 世紀という時代に見合う、新しい諸要素も種々付け加えられている。人種論は、19 世紀に入ると、イギリスやドイツなどで、ブルーメンバッハの五人種論を基礎にして、コーカサス人のなかでも「チュートン人」こそが最も優れた人種であり歴史の推進者だとの主張が行われるようになる。ホワイトは、こうした新しい議論を早速導入している。また、エマ・ウィラードとは違って、啓蒙主義歴史学が開始した意味での古代・中世・近代の三区区分法が採用されている。その「中世」が「蛮族の侵入」（＝ゲルマン人の移動）から、「近代」が「宗教改革の時代」から開始されている。また古代では、アッシリア史を伝統のくびきから解放している。『普遍史概説』の初版出版は 1853 年である。A.H. レヤードがニムロド（ニムロデの丘＝サルゴン二世の宮殿）、ニネヴェ（センナケリブの宮殿）を発掘し、今日の大英博物館を飾っている遺物を発見したのは、それぞれ、1845、1848 年であった。ホワイトはこの発掘の結果を直ちに受け容れ、普遍史で伝統的に設定されてきた「新アッシリア」を廃棄した。つまり、建国者ニヌスに始まる伝説のアッシリアと聖書のアッシリアとを同一の帝国（＝今日のアッシリア）として記述している。さらに、中世のイタリア史では、メジチ家以外の固有名詞は含まないごく簡単な記述ではあるが、「文学と芸術の復興」（＝ルネサンス、158）について触れている。各国の歴史

でも、社会、文化、学術にも触れている。小沢栄一氏は『萬國通史』について、「治乱興亡の国王本位の政治史であることはいうまでもないとして、近代の各国史については、社会・文化面にも及んだ比較的まとまりのよい西洋通史の教科書であった」(91)と評価しておられる。筆者も同感である。文化史は啓蒙主義的世界史がもたらしたものであり、このように、ホワイトの教科書は啓蒙主義的な要素も導入しているのである。

ホワイトがフランス革命について述べるのは本書の最終節「ヨーロッパ近年の諸革命」においてであるが、まずは極めて簡潔な記述が特徴である。三部会開催からバスチーユ攻撃、人権宣言からすぐに諸党派の争い、国王処刑、ロベスピエールの恐怖政治とその没落へと進み、全 270 頁のうちたったの 3 頁で済ませている。革命全体については、「1789 年 5 月 5 日の三部会招集は、19 世紀の半ばにあってなお、多分、我々がその結論を見てはいない一連の大変動の開始であった」(260)と述べ、控えめながら、今日への進歩の出発点と表現している。ロベスピエールを「主義として、血を流した」(261)としてその思想と行動を批判しているが、安息日の廃止等々を持ち出して弾劾するという、キリスト教的観点からアメリカの教科書が行ったような記述は行っていない。

以上の諸点から見て、彼の『普遍史概説』は、『パーレー萬國史』やエマ・ウィラードに比してはるかに啓蒙主義的世界史に近い位置を占める、「19 世紀的普遍史」の教科書であった。

『萬國通史』は内容的には西洋史のみであり、分量もかなりあるから、授業で教科書として使用するとなると、相当な工夫が必要ではあろう。とはいえ小沢栄一氏の評のように「比較的まとまりのよい」ものであり、年号をアッシャーの年代学に依拠しているものの、特に中世、近世の記述についてはキリスト教的色彩も強くない。ホワイト

の教科書は、その記述から古代における普遍史的な要素を削除すれば、啓蒙主義的な要素のほう前面に出てくるという内実を備えていたのである。しかも『萬國通史』は、翻訳に際して、聖書に基づく記述のほうを削除している。こうしたことから、原書は「19 世紀型普遍史」ではあったが、『萬國通史』自体は、次の時代の「文明史型万国史」の先取りの位置を占めているのである。

### 普遍史型万国史の時代

「学制」下、明治 10 年頃という時点での主な教科書とその諸原典について見てきた。これらの教科書全体に言えることは、世界と人類史の始まりの記述では原典の記述に対する翻訳者たちの様々な葛藤や反発などが見られるものの、しかし、『萬國通史』を除けば、アダムとエヴァから記述したという意味で、「普遍史型」の万国史となっているということである。

天地創造の記述を原書通りに記述しているのは、牧山耕平『巴來萬國史』のみである。これは参考書として訳した関係で意識や省略が出来ないという事情があり、やむを得ないことだったろう。だが彼の場合、“true God” (46) を「眞神」と訳すのはよいとして、天地創造のところでは“God” (31) を「眞神」、ヘブライ人の歴史のところでは同じ“God” (47) を「天神」と訳していて、理由は不明だが、一定していない。しかし「アダムトイフノ二人ハ創造セラレ」(24)と、今日同様に「創造」と訳している。これと対極に位置するのは、ホワイトの記述の翻訳を拒否した作樂戸痴鶯他譯編『萬國通史』である。作樂戸痴鶯らに近いのは寺内章明『五洲紀事』で、天地開闢の話は「西人<sup>びよう</sup>渺々の説」だとして「之を畧す」としている。ただし略したのは天地創造の部分のみで、アダムとエヴァについては記述し、二人は「降<sup>こ</sup>生<sup>う</sup>したと表現している<sup>(51)</sup>。また、人類の墮落を見て「上帝之を怒り」、大洪水を起こしたとも述べ

ている。上でも紹介した西村茂樹と井出猪之助も“God”を「上帝」と訳した人たちである。これらと異なり官版『萬國史畧』の場合は、先にも引用したように「西洋/説ニハ」としつつ、天地創造は素通りして、アダムとエヴァが「化生」したと述べている。「化生」は元来は仏教用語で「四生」（胎生、卵生、湿生、化生）の一つで「無から生まれる」の意だが、『日本書紀』には「神代上」の第一の「一書」で国常立尊を「化生之神」として既にこの段階で「神話」に取り入れているから、『萬國史畧』の場合は、国学の立場での説明としてよいだろう。そしてそこではキリスト教的な「神による創造」は、否定していることになる。また寺内章明のアダムに関する訳文をほぼそのまま使用した西村兼文『外國史略』は、天地創造については、「天地未だに割たざりし時、渺々濛々として陰陽を分たず。既に始めて開けるに至りては自づから萬物を生じ、人其中に養ふ。是天地陰陽の靈にして萬物の長たり」と、こちらは、陰陽説で説明している。ただしこれも、『日本書紀』の「神代上」冒頭の「古天地未だ割れず、陰陽分かれざりしとき…」とある記述をもとにしたのであろう。最後に田中義廉『萬國史畧』の場合は、官版『萬國史畧』同様に「創造」の記述を素通りし、そのうえで、「上古人類の地球に創生したる始は詳明ならずと雖も、大約六千年前に在て、…ユーフラテス、チグリス両河の近傍に一男一女生る。これをアダム、イブと稱す」と言い、西村兼文と同様、「自づから」生じたものと述べている。

天地と人間の創造という神の奇跡は、西欧の伝統的普遍史では不可欠な要素であり、その冒頭に記すべき事柄だった。そこは、「創造神」という、キリスト教の神の最も基本的な性格を記述することが定番となっていた場所だったからである。翻訳者たちは、それだけに、この部分を教科書に記載すべきかどうか、どのような形で記述するか、

苦心したことであろう。その苦心の結果は、キリスト教的な「創造神」に関してはこれを無視したり、あるいは「上帝」を持ち出したりして、中国や日本の伝統的な考え方に引き寄せて様々な形で換骨奪胎を行うということになった。しかし、そうしたうえでしろ、彼らは、『萬國通史』以外には、アダムとエヴァからの記述は残した。ただし、そこでも、アダムとエヴァには「化生」という国学的ないし神道的な衣装を着せたりして、神による「創造」という記述は避けているのである。

「ヨーロッパでは一八四〇年代までに聖書の普遍史はほぼ乗り越えられた」<sup>(52)</sup>とも、イギリスでは「一九世紀の前半に神学的世界史を脱する記述が支配的になっていった」<sup>(53)</sup>とも言われている。こうした転換の過程で最も大きな役割を果たしたのは、啓蒙主義的世界史であった。ドイツなどでは、19世紀後半には、その啓蒙主義的歴史学を批判しつつ登場したランケ学派による「科学的歴史学」の時代を迎えていた。とはいえ、教科書の世界にかぎっては、ドイツでさえヴェルターの教科書がそうだったように、イギリスでもアメリカでも、一旦高く評価された教科書は、どれも非常に長命であった。19世紀半ば頃までに出版されたタイトラー、エマ・ウィラード、グッドリッチ、ホワイトなどの教科書が、世紀後半、著者の死後にあつてすら、なお版を重ねていた。他方では、西村茂樹は、既にウインネや後述するテイラーの啓蒙主義的世界史も参照していた。日本には、旧タイプに近いものからほとんど啓蒙主義に近いものも含む「19世紀的普遍史」と、ウインネはじめテイラー、さらにはフリーマン、スウィントンなどの啓蒙主義的教科書とが、渾然一体の状態でもたらされていたのである。

こうした状況のなかで、官版の『史畧』、『萬國史畧』をはじめとした「翻訳教科書」の著者たちは、「19世紀的普遍史」のほうを手本として選択

した。そして、日本史は独立させたが、世界を国家の集合体とする基本的観点に基づき、世界史を万国史として編成した。そこでは『パーレー萬國史』が最も大きな影響を与えたが、それは、このような世界の歴史的認識に対する当時の要求に対応するには、各国史を最重視したその構成の仕方が、他の「19世紀的普遍史」に比して遙かに優れた手本と受け止められたからであろう。

しかし、万国史の構成は、西欧の啓蒙主義的教科書からでも不可能ではなかった。後に見るように、「普遍史型万国史」の後に、啓蒙主義的世界史に基づく「文明史型万国史」が実際に形成されてくるのである。にもかかわらず、彼らが強制ではなく主体的な選択の結果最初に選んだのは、「19世紀的普遍史」のほうであった。とすれば、そこには、キリスト教的記述には抵抗感を感じつつも、なお、啓蒙主義的世界史よりも「19世紀的普遍史」のほうに親近感を持つ、何らかの契機があったと言えそうである。

この問題に対する回答については、筆者にはまだ持ち合わせがない。だが、とりあえず二点のみ、指摘しておきたい。一つは、蘭学の学統中にキリスト教的歴史観が継承された形跡が存在することである。そして、細流であっても、これが「普遍史型万国史」の形成に向かう契機となった可能性があるということである。

この細流の源流となったのは、新井白石の『采覧異言』を増訂して『訂正増訳采覧異言』（1804、文化1）を著し、江戸時代の地理学を代表する一人とされる山村才助（昌永、1770-1807）である。彼のもう一つの代表作で公刊もされた『西洋雑記』（1801、出版は1848、嘉永1）は、「日本における西洋史学の嚆矢」<sup>(53)</sup>ともされる。西洋史の記述は、巻一冒頭で記述される世界開闢の説・洪水並びに聖人ノアの説・バベルの高台の説・西洋古今四大君の説・バビロニア並びにペルシアの二大君

伝説の説・ギリシア大君の説・ローマ国大君の説・西洋中興革命の説並びに諸国年号の説という諸項目で行われた。「世界開闢」から「バベルの高台」までは創世記の物語であり、「西洋古今四大君の説」とは、本稿で述べてきた「四世界帝国論」に他ならない。その四国をバビロニア、ペルシア、ギリシア、ローマとしてその歴史を略述し、「西洋中興革命」でキリスト紀元を説明し、最後に、それが以後の諸国史の基本年号として使用されることを述べている。キリスト紀元の発生とその使用を「中興革命」と呼んだのは、原典で以後の年号が全てキリスト紀元で記されるように変わること、しかもキリスト紀元元年がちょうど辛酉の年に当たることからであった。

それではキリスト紀元開始以前では、如何なる年号が使用されていたのであろうか。彼は、ゴットフリートの『西洋全史』<sup>(54)</sup>を原典としていた。本書は少年ゲーテも読み、「世界史の最も重要な諸事件を教えられ」<sup>(55)</sup>たと記しているものだが、ゴットフリートは改革派（カルヴァン派）の神学者、歴史家であり、本書はプロテスタント的普遍史のうち、カルヴァン派的普遍史と呼べる年代記であった。それは、キリスト紀元元年が「世界の創造後 3950 年」（297）とされているからである。そして、キリスト紀元が開始される以前の時代については全て創世紀元（世界年代）で示され、その年号体系が、カルヴァン派を代表する年代学者、スカリゲル（Joseph Justus Scaliger, 1540-1609）の年代学に基づくものだからである<sup>(56)</sup>。プロテスタント的普遍史であることは年号だけでも明らかだが、他にもう一点、そのアッシリア論も挙げておこう。ゴットフリートは新旧二つのアッシリアを語り、しかも第一の世界帝国を「アッシリアまたはバビロニア帝国」（23）としているからである。これはまさにメランヒトンの第一の世界帝国論そのものであり<sup>(57)</sup>、山村才助は、そのうちの「アッ

シリア」を省略して「バビロニア」だけを訳出していたのであった。

以上を一言で言えば、山村才助はオランダを通じてプロテスタント的普遍史を受け取り、それを初めて日本に紹介したのである。そして彼の情報に基づいて、その後、佐藤信淵『西洋列国史略』（文化5、未刊）、斎藤竹堂『蛮史』（嘉永4、未刊）、大槻西盤『遠西紀略』（安政2、刊本）等々が書き継がれたのであった<sup>(58)</sup>。

一方、海老沢氏は、キリスト教的西洋史記述は「高札撤廃後、かえって減少し」（336）、結局、維新前後から昌永の学統が「影を没してい行く」（337）と述べ、「資本主義社会形成期におけるフランスの啓蒙思想やイギリス的功利主義思想の流行、バックルやギゾーの史学が新時代の史観として、進歩的思想として官僚的イデオログラによって唱えられ、文明開化の唯物的実利主義の風潮の下に鎖国禁教下に芽生えたキリスト教的史観乃至キリスト教史学の日本における西洋史学樹立の意義が無視せられ、ついには忘れ去られてしまった」（336以下）とされている。しかし、本稿での「普遍史型万国史」の時代は、海老沢氏がキリスト教的史観が「影を没していく」とする、まさにその維新初期において、しかも、それを「無視」とされる維新政府（文部省）自身が『史畧』や官版『萬國史』等を自ら編集・刊行して、開始されている。海老沢氏の視野には、こうした教科書界の新たな動きは入っていないように見える。とはいえ、上の西村茂樹の場合は、そこで検討したように、近世のキリスト教的世界史の流れとは結びついていないようにも見える。山村才助以後の流れが「普遍史型万国史」に接続するのかどうかについて、可能性は認めるにしても、まだまだ事実関係で不明ことが多い。この問題は、今後の課題として残しておきたい。

第二に指摘しておきたいのは、『萬國通史』を除

くほとんどの教科書が日本史、中国史、西洋史の全てを神話・伝説から開始することに、「19世紀的普遍史」と「普遍史型万国史」との結節点を見いだせるのではないかということである。ここまで見てきたように、「普遍史型万国史」の著者たちは、いずれも、キリスト教的歴史観の根本にある「神」については原書そのままの記述を避けていた。しかし、他方で、その神によって「創造」されたという記述を忌避しながらも、アダムとエヴァから西洋史を開始していた。また人類の始まりの部分のみではなく、アッシリアやギリシア、ローマ等々のどの古代諸国についても、神話・伝承に基づく記述から開始していた。もちろん、これらの神話・伝説は、原典そのものが記述していたものだったのである。このことは、「19世紀的普遍史」と「普遍史型万国史」の著者たちが、共通する心性を有していたことを示唆しているように思われる。だが、残念ながら、この問題の追求もまた、今後の課題とせざるを得ない。

しかし、こうした課題は残さざるを得ないとしても、事実として、日本における最初の世界史教科書、『史畧』や『萬國史畧』をはじめとする諸教科書の記述者たちは、いずれも、啓蒙主義的世界史でもなく、また最新のドイツ歴史学の「科学的」な世界史でもなく、ヨーロッパでは古代以来の伝統は持つものの当時にあつては最も旧式に属する、「19世紀的普遍史」の受容に踏み切った。そしてこの結果、日本の世界史教科書は、「普遍史型万国史」を第一世代として、その歴史を開始したのである。

## 第2章 学校教育体制模索期における世界史教育 (1879、明治12-1886、明治19)

### —啓蒙主義的世界史への傾斜—

#### 世界史教育が中学校に移行

「学制」のもとでは、明治政府の文教政策が強力



な中央集権的行政によって強制的、画一的に、しかも国民の大部分を占める農民たちに極めて重い負担を強いつつ遂行された。そのため様々な問題が噴出し、各地で「騒擾」も発生した。こうした諸問題への対処のため、1879（明治12）年に「教育令」が制定され、「学制」は廃止された。だが新「教育令」は復古主義からの攻撃を受け、その結果直ちに改訂の作業が進められることになり、明治13年に「改正教育令」が制定された。明治14年、これに基づいて「小学校教則綱領」と「中学校教則大綱」、「師範学校教則大綱」が定められた（表1・6）。

表1・6 「改正教育令」下の小学校と中学校

年齢	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17
小学校	初等科			中等科			高等科					
	1	2	3	1	2	3	1	2				
中学校							初等中学				高等中学	

※各学年は、2期からなる。  
 ※大学進学：公立中学校と私学（公立中学校はレベルに差のあるものが多かったため、私立の東京英語学校、共立学校、成立学舎等が大きな役割）→大学予備門（4年）→東京大学

「中学校教則大綱」は、「中学校ハ高等ノ普通學科ヲ授クル所ニシテ中人以上ノ業務ニ就クカ為メ又ハ高等ノ學校ニ入ルカ為メニ必須ノ學科ヲ授クルモノトス」（第一条）と定めている。すなわち、小学校が「良民」を育成することを主眼とするのに対し、中学校の目的は、大学等への進学者と並んで、「中人」を、つまり「國家ノ支柱タルヘキノ人士」<sup>(69)</sup>を育成し、富国強兵に資するエリートを養成することと明記されたのである。

この制度改革に伴い、「小学校教則綱領」で、小学校では中等科で日本史のみを教えることとし、その内容と目的を定めている。

歴史ハ中等科ニ至テ之ヲ課シ日本歴史中ニ就テ建國ノ體制、神武天皇ノ即位、仁徳天皇ノ勤儉、

延喜天曆ノ政績、源平ノ盛衰、南北朝ノ兩立、徳川氏ノ治績、王政復古等緊要ノ事實其他古今人物ノ賢否、風俗ノ變更等ノ大要ヲ授クヘシ凡歴史ヲ授クルニハ務テ生徒ヲシテ沿革ノ原因結果ヲ了解セシメ殊ニ尊王愛國ノ志氣ヲ養成センコトヲ要ス

他方、「中学校教則大綱」では、歴史の授業は「初等中学科」の四年間、毎週二時間教えることとなった。世界史教育は、年齢は「学制」時代と同じ12歳からではあるが、小学校ではなく、中学校に移されたのである。

#### 大坂中学と京都中学における世界史教育

「中学校教則大綱」は、小学校の日本史と違い、世界史教育の内容まで規定してはいない。一方、1822（明治15）年になると、各府県から「中学校教則大綱」に則った学則の改革案が提出され、文部省の審査を受けている。明治15年の『文部省日誌』に拠って、その審査の過程から、具体的内容を探ってみよう。

まず第一の事例として取りあげるべきは、官立大坂中学校の場合である。その教則は、「地方中学校の模範とされた」<sup>(60)</sup>とされているからである。また、『文部省日誌』には、実際に記載されていないかどうかは不明だが、教科書を明示しないまま申告した例や省略されている例も見られ、大坂中学の場合は、明記されている数少ない例の一つでもある。こうしたこともあわせると、大坂中学の事例を、教科書も含めて、典型的事例とする意図が文部省にはあったように見える。

「大阪中學校伺」は明治15年2月に提出され、4月に条件付で「伺之通」となり、7月に修正を受けて最終的に認可されたものであった。次表は、その初等中学科に於ける歴史教育案から作成したものである（表1・7）。

表1・7 大坂中学における歴史教育

日本史	1年	12歳	前期	神代～平氏末まで
			後期	頼朝が總追捕使に～豊臣氏末
支那史	2年	13歳	前期	家康が將軍になる～現在まで
			後期	太古から五代まで
萬國史	3年	14歳	前期	宋から「今代」まで
			後期	「上古史」
萬國史	4年	15歳	前期	「中古史」
			後期	「近世史」

使用する教科書は、「支那史」では『十八史略』と宮脇通赫編次『續十八史略』、「萬國史」では、西村鼎（＝西村茂樹）『泰西史鑑』、及び堀越愛國『近世西史綱紀』<sup>(61)</sup>とその続編＝保田久成篇譯『続西史綱紀』<sup>(62)</sup>である。

上で「条件付」で認可されたと述べたが、その条件の一つは、申請書類で欠けていた「各學科授業ノ要旨」を急ぎ書き加えるようにということであった。これに応じて急遽4月に提出された要旨のうち、「歴史」には、次のような説明文が付されている<sup>(63)</sup>。

凡ソ臣民タル者自國ノ沿革ヲ知ルコト最モ緊要ナレハ本邦ノ歴史ヲ課シ主トシテ建国ノ體制、風俗ノ變遷、政治ノ沿革、明主賢相ノ治績、忠臣義士ノ偉行、學藝ノ隆替、武備ノ張弛等ヲ講明シ民生ノ休戚ハ常ニ皇室ノ隆替ト相從フノ實跡ヲ説キ務メテ尊王愛國ノ志氣ヲ振起センコトヲ要ス支那モ亦本邦ト最モ親密ノ關係ヲ有スル國ナレハ次ニ其歴史ヲ課シ終ニ他ノ海外諸國ノ歴史ニ及ホシテ其形勢ノ概略ヲ知ラシムヘシ

「小学校教則綱領」と同様に、中学でも、「日本史」については「尊王愛國」という目的が明記されている。一方、世界史も、編成が「学制」期のそれとは変化してきている。世界史をあらためて「支那史」と「萬國史」に分け、官版『萬國史畧』のように「アジア州」の一国として扱うのではなく、「支那史」を独立的に扱い、かなり時間を割い

て教えることとなっている。これもまた、儒学の故地中国を重視している点で、復古主義の一つの現れであろう。

次に、同じ明治15年に認可された京都中学の例も見ておこう。これも同年2月に申請が提出され、3月に、一定の修正を「開申」（＝申告）することを前提に、「伺之通」と認可されている。日本史の要旨の説明文が不十分だとして文部省が要求した修正とは、「歴史ノ部ノ本邦歴史ヲ授クルニハ殊ニ尊王愛國ノ志氣ヲ振起セシムルニ注意スヘキ旨ヲ記載」<sup>(64)</sup>することであつた。歴史は初等中学校の第1年で日本史を教え、続いて「支那史」を第2年と第3年前期で、万国史は第3年後期と第4年で授けることとなっている。また万国史の教科書は、「スウキントン氏萬國史ニ依リ」（235）とされている。京都中学の場合、支那史を大阪中学より重視して1年半（3期）を当てたことが異なるが、大阪中学と同様、万国史には第3学年後期以後の合計3期を当てている。

他の中学に関しては、大坂中学にならった諸例もあるものの、三重中学のように日本史には3期充当するが支那史には2期半、万国史に2期半を当てるところもあり、時間配分では、或る程度の自由があつたようである。しかしいずれにしろ、日本史の目的を「尊皇愛國ノ志氣ヲ振起セシムル」と規定していること、また、日本史から「支那史」、最後に「萬國史」の順で教えること、そして支那史がこのように独立科目的に扱われ、その比重が「学制」よりはるかに増大してほぼ「萬國史」と同等の扱いを受けていることは、どの中学校も共通である。

#### 「教育令期」における万国史教科書

「教育令期」の万国史教科書に関する具体的情報は大変少ない。そうしたなかでは不完全さを免れることは出来ないが、以下は種々のデータから集めたものである（表1・8）<sup>(65)</sup>。

表1・8 「教育令期」における世界史教科書

<p>【明治12年】「小学教科書一覧表」(『文部省第七年報』)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ビートル・パニーリー著、西村恒方直訳『萬國歴史(3冊)』千生樓ほか、明治5</li> <li>・牧山耕平『巴來萬國史(2冊)』文部省、明治9</li> <li>・師範学校編輯(大槻文彦)『萬國史略(2冊)』東京師範学校、明治12など</li> <li>・田中義典『萬國史略(5冊)』温故堂、明治8</li> <li>・作樂戸海峯・秋山政策・稲垣銀治譯編『萬國通史(9冊)』文部省、明治6～9</li> </ul> <p>【明治13年】「小学校教科書表」(『文部省第八年報』)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・師範学校編輯(大槻文彦)『萬國史略(2冊)』東京師範学校、明治12など</li> <li>・フリーマン著、永井謙蔵訳『西洋史略(2冊)』石川治兵衛、明治12</li> <li>・西村茂樹編輯『校正 萬國史略(11冊)』編輯者蔵版、明治5～9</li> </ul> <p>【明治14年・15年】</p> <p>※「教科書調査一覧表」(『文部省第九年報』、『文部省第十年報』)：万国史関係教科書については、小・中学校、師範学校全てに關し、「採用シテ苦シカラサル分」にも「採用スヘカラサル分」の中にも、一切記載されていない。</p> <p>※「文部省日誌」(明治15年)記載の大坂中学と京都中学の教科書</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・西村鼎(＝西村茂樹)『泰西史鑑(10冊)』稲田佐兵衛、明治1～14年</li> <li>・堀越愛國『近世西史綱紀(10冊)』文部省一東京師範学校、初版明治4及び、保田久成篇譯『続西史綱紀(2冊)』東京師範学校、明治12</li> <li>・スウィントン『萬國史』；京都中学</li> </ul> <p>【明治16年】「教科書調査一覧表」(『文部省第十一年報』)：中学校及師範学校教科書ニ採用シテ苦シカラサル分の中に、次の一点のみ記載されている。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・西村茂樹編輯『校正 萬國史略(11冊)』編輯者蔵版、明治5～9</li> </ul> <p>【歴史教科書総目録】：『日本教科書体系 第20巻』、〔 〕は筆者が補充。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・テイラー著、木村一歩・海老名晋・永田健助共訳『迭洛爾 萬國史(4冊)』東京【文部省】明治11〔～18〕；英人ウイレム・ターク・テイラーの著書1867年ニューヨーク刊行本を訳出した通史。</li> <li>・永井謙蔵(訳)『西洋史略(3冊)』東京、明治12；英人イトワルド・フリーマン著『イウロパ』の翻訳。</li> <li>・荒木市太郎『萬國史略(2冊)』滋賀、明治12；師範学校編『萬國史略』を本文とし、上部に詳細な設問、各巻末に字句の訓註を加えた。</li> <li>・小林義則『小學萬國歴史(2冊)』東京、明治13；世界史を上古・中古・近古・近世の各史に分けて概述したもの。</li> <li>・津田甚三郎『萬國歴史』[皇雲書店]、明治15；[官版]『萬國史略』型の万国史。</li> <li>・岡千保(訓点)『訂正 萬國史鑑(6冊)』東京、明治17；ウィルソン、スウィントン、ローリンソン、タルヘマー等の萬國史六書を漢訳したものに訓点を加えた。</li> <li>・岡本監輔『萬國通典(6冊)』東京、明治17；漢文による体系歴史事典で、皇國・漢土・泰西についての沿革と現状を記したもの。</li> </ul> <p>【近代デジタルライブラリー】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・岡本監輔『萬國史記(20冊)』岡本監輔、明治12；[漢文の]『史略』型萬國史</li> <li>・久松義典『萬國史略(4冊)』集英堂、明治13；[パーレー萬國史型教科書]</li> </ul>
--

残念ながら網羅的リストではないものの、この表について、次の二点に注目しておきたい。その第1は、世界史教育が中学校のみの教科となった後にも、なお引き続いて、「普遍史型万国史」の教科書も使用されていたということである。これは教科書調査のリストの最後に西村茂樹編纂『校正萬國史略』が記載されていることで明らかだが、大坂中学の場合も、その例である。大坂中学では三種類の教科書を使用しているが、このうち、『近世西史綱紀』は、文部省職員の堀越愛國が、最初は大学南校、次いで東京師範学校の教科書としてウィルソンの『歴史概説』のうち1500年以後を翻訳したものである。しかしこれは部分訳であったため、保田久成がクリミア戦争から普仏戦争までを「バーンズの萬國史」から訳出した『続西史綱紀(2巻2冊)』を合わせて現代まで教えることとした。しかしそれでもなお上古史・中古史がカバーできないので、『泰西史鑑』を使用して教えたのである。『泰西史鑑』は、上述のように、「19世

紀の普遍史」であるヴェルターの『世界史教科書』の翻訳書であった。ウィルソンの教科書もまた、「19世紀の普遍史」である。つまり、全体としては「普遍史型万国史」が教えられたということになる。さらにまた『史略』や官版『萬國史略』型の教科書がなお何種類か出版されている。また、当時はまだ『パーレー萬國史』が英語のテキストとして使用され続けており、最も普及した牧山耕平訳『<sup>パーレー</sup>巴來萬國史』は、1890(明治23)年に至るまで数版を重ねている。これらの教科書はどれも詳細なものだし、全体としてかなり大部になる。しかし、「学制」下における教科書にもかなり大部となるものがあったから、そこで述べた、「第一グループ」に属するものやそれと同規模の「普遍史型万国史」諸教科書の場合も、『パーレー萬國史』も含めて、新しい中学校でも使用されていたと考えられる。

注目する第二点は、翻訳教科書の原典の著者として、テイラー、フリーマン、スウィントンの三名が、この時点で登場してくることである。特にスウィントンの人気は教科書の世界の外でも高く、明治16年から22年にかけて一挙に8点もの翻訳が出版されたとされている<sup>(66)</sup>。三名が書いた教科書は、結論から言えば、いずれも啓蒙主義的世界史だったのである。

## 啓蒙主義歴史学と自由民権運動

西欧の啓蒙主義的世界史は、早くから日本にもたらされていた。しかしこれまでの教科書の世界では、「19世紀の普遍史」の影響のほうが全体を支配していた。そうしたなか、西欧の啓蒙主義的世界史の影響が、この時点で、教科書界の表面に現れ始める。この動きの原因は、二つ考えられる。一つは歴史学自体の動きであり、他は、自由民権運動である。

小沢栄一氏によれば、近代日本の歴史学には二つの潮流があった。一つは「大学の史学」、他は「啓

蒙主義的文明開化史」(2)であった。前者は江戸時代以来の儒教史学、清朝考証史学の流れとドイツ実証主義史学との連結によって形成された地盤の上に成立したものであった。これに対し、後者は江戸時代後期の「洋学の付随的知識として輸入された西洋歴史への関心が、とくにその啓蒙性を継承して、明治啓蒙思潮に裏付けられ、万国史から文明史に転化し、…啓蒙主義的文明開化史の潮流を形成した、主としては在野の『史学』である」(2以下)<sup>(67)</sup>。これは「官学アカデミズム史学」に先立つ潮流であって、ギゾーとバックルという仏・英の啓蒙主義史家の影響を受けつつ、『文明論之概略』(1875、明治8)で「はじめて日本の歴史に啓蒙の光を当てた」(124) 福沢諭吉に始まり、「日本啓蒙史学の金字塔」、田口卯吉『日本開化小史』(明治10-15)によって「確立」(125)したとされている。「教育令期」における世界史教科書をめぐる動きの背後には、こうした日本における啓蒙主義的文明開化史の確立という学問的状況が存在していたのである。

この「教育令期」は、同時に、自由民権運動の高揚期にも当たっている。テーラーとフリーマンがこの時期に教科書として翻訳されたのも、とりわけ、強力に民主主義を説いている「スウキントン『萬國史』」が京都中学で教科書に採用することが認められているのも、このことと無縁ではないであろう(表1・8)。一方文部省も、自由民権運動に教員が多く参加したことから、その影響を教育の場から排除しようと様々な手を打っている。「改正教育令」(明治13)で「品行不正ナルモノハ教員タルコトヲ得ス」という但し書きを追加して締め付けを明記しているし、明治13年から「教科書調査」(～明治17)を開始し、例えば加藤弘之の『國體新論』、同『立憲政體畧』のほか、福沢諭吉著『通俗國權論』などが「中学校及師範学校教科書ニ採用スヘカラサル分」として挙げられて、

教科書の世界から追放されている。同じ明治13年には「集会条例」を公布したが、そこでは、教員(と生徒)が政治に関する事項を講談論議する集會に参加することも、また政治的団体に加入することも禁止している。さらに「小学校教員心得」(明治14)を制定して教員には「中正ノ見ヲ持シ就中政治及宗教上ニ涉リ執拗矯激ノ言論ヲナス等ノコトアルヘカラス」と命じている。教科書の採用・変更についても、明治14年4月の「開申制」(届出制)を経て(ちなみに、京都中学が「スウキントン『萬國史』」の使用を認められたのはこの「開申制」の時期であった)、16年7月には「認可制」へと移行して文部相の許可を必要とするようになり、ついには、明治19年に森有礼文部大臣のもとで確立される、教科書検定制度へとつながっていくことになる。

#### 木村一步とテイラー

ところが、自由民権運動と対決していた文部省自身が、木村一步テイラー他共訳『迭洛爾萬國史』(明治11～18)を出版している。この事態をどのように考えればよいのであろうか。一般的には西欧の啓蒙主義は市民革命を準備し、導いた思想であり、この時期に啓蒙主義との結びつきが推定されるのは、政府(文部省)よりは、むしろ自由民権運動のほうだからである。そこで、テイラー『古代・近代史のマニュアル』の内容を確かめるとともに、文部省がその翻訳と出版に取り組んだ事情について考えてみたい。

テイラー(William Cooke Taylor, 1800-1849)はスコットランド出身の歴史家であり、穀物法反対同盟の初期からのメンバーとして活動した自由貿易主義者だった。彼の『古代・近代史のマニュアル』<sup>(68)</sup>は、1836-38年にイギリス、1844年にアメリカで初版が出版され、死後も、両国で長い間出版され続けている(表1・9)。

表1. 9 テイラー『古代・近代史のマニュアル』  
の構成

古代史	
1章. エジプト、	2章. エチオピア、
3章. バビロニアとアッシリア	
4章. 西アジア、	5章. パレスティナ、
6章. メディア人とペルシ	
人の帝国、	7章. 北アフリカにおけるフェニキア人植民地、
8章. ギ	
リシア諸国の成立、	9章. ペルシア戦争以前のギリシア諸国と植民地、
10章. ペルシア戦争以後アレクサンダーの王位継承までのギリシア史、	
11章. マケドニア人の王国と帝国、	12章. マケドニア人の帝国崩壊
後の諸国史、	13章. 太古イタリアの歴史、
14章. シチリアの歴史、	
15章. 共和政期ローマ史、	16章. ローマ帝国の地理的、政治的状況、
17章. ローマ帝国の歴史、	18章. インド。
近代史	
1章. 西帝国滅亡の諸結果、	2章. サラセン勢力の勃興と形成、
3章. 西帝国の復興、	4章. 教皇権力の伸張、
5章. 文芸の復興 一文明と発明の進歩―	6章. 宗教改革及びヨーロッパにおける諸国家体系
の開始、	7章. イギリスとフランスのオーガスタン・エイジ、
8章. 通	
商システムと植民地システムの成長、	9章. 革命の時代、
10章. フランス	
帝国、	11章. 平和の歴史、
12章. 植民の歴史、	13章. 中国の歴史、
14章. ユダヤ人の歴史、	15章. アメリカ合衆国の歴史。

彼は本書の目的は「生徒の注意を文明の進歩へと向ける」(序論) ことだと述べており、一言で言えば、本書はホイッグ的進歩史観を基礎にした世界史教科書である。年号も、創世紀元は使用せず、キリスト紀元 (B.C.を含む) のみを使用している。ドイツの啓蒙主義歴史学者で「ゲッティンゲン学派」の一人ヘーレン<sup>(9)</sup>に多くを負っているとも述べて普遍史では扱われることの無かった通商史を重視し、古代ではほぼ各国毎に産業、通商に関する節を設けているし、近代でも第8章の一章を当てている。これは彼がもともと経済に深い関心を持っていたからではあるが、その具体的記述は、ヘーレンに依拠している。また、近代の第6章を「宗教改革、ヨーロッパにおける諸国家体系の始まり」と題している。ヘーレンが提出したこの「諸国家体系 (Stasatensytem)」の概念は16世紀以降のヨーロッパ国際関係を的確に表現するものとして大きな影響を与え、今日の世界史教科書で使用されている「主権国家体制」やウォーラーステインの「近代世界システム」などの出発点になった概念であった。

こうしたこと以外にも、表1・9を一瞥しただけで、本書が「19世紀的普遍史」と大変異なった構成を有していることは、明らかであろう。古代では、天地創造やアダムからではなく、最古の文明、エジプト文明から記述を始めている(人種論

は述べていない)。アッシリアは、前1237年頃のニムロデ=ニヌスから始まり前667年に滅亡したと述べて、プロテスタント的普遍史の伝統だった新・旧アッシリアの区別は否定している。近代では、第5章と7章は、ともに文化史記述である。このように、普遍史では顧みられなかった文化史や通商史が重視されているのである。

文部省とテイラーとの関係を考える場合に重要なのはそのフランス革命像だが、彼は、やや特殊な記述を展開している。まず第一に、フランス革命の細部はフランス史に譲るとして、もっぱらフランス革命がもたらした国際社会の変化を記述しようと努めているからである。記述はハイチの黒人奴隷の反乱等にまで目配りされていてかなり詳細なものだが、端的に言えば、フランス革命は、イギリスがインドに至る巨大な海上帝国を建設していくのに対抗して、フランスがヨーロッパ大陸の覇者の地位を築いていく運動とされている。そして第二にそれが特殊なのは、その「フランス革命」の期間の設定が、他に見られないものだからである。彼がその始点に置くのは、「ヴェルサイユ行進」の結果、民衆に強制された形で国王(と議会)がパリに移転した事件(1789年10月)である。以下は事件に関する記述だが、そこには革命全体の評価も含まれている。

この極悪な不法行為こそ、フランス革命の開始と見なすにふさわしいことであつた。というのも、以後は王の権威は空虚な名ばかりのものとなり、全ての古来の統治形態が排除された。空想家たちが物事の新しい秩序の思弁にふけり、熱烈な愛国者たちが世界が未だかつて見たことがないような完全な国政を樹立しようと望みはしたものの、しかし、卑劣漢と下劣な輩たちが民衆の残虐性を刺激しつつ自己の利己的目的を追求し、そしてその期待が満たされたものとい

えば、…唯一、第三身分だけだったのである(642)。

革命の終期はナポレオンが終身頭領となる1802年8月までとされているから、彼が革命期とする期間は共和政期にほぼ対応し、そして、共和主義者たち、とりわけ「下劣な輩」(ジャコバン派)たちが強く否定されているということになる。さらに、「ロベスピエールの後継者たちは、彼と全く変わらない者たちだった。即ち、彼らは、直近のフランス海軍の敗北により、反イギリスで凝り固まった者たちだったのである」(647)と、ロベスピエールを倒した人々に対しても、否定的評価が下されている。つまりは、イギリスの議会主義的立憲君主政を高く評価して共和主義や民衆の直接行動を「極悪な不法行為」として厳しく批判し、対仏大同盟をはじめ、海上帝国イギリスがフランスに対抗してとった革命期の諸政策を擁護する立場から、フランス革命が記述されているのである。

本書の特徴全体をまとめるに際しては、普遍史の要素が皆無とは言えない点にも注意しなければならないだろう。彼は「古代」と西ローマ帝国以後の「近代」とにしか時代を区分せず、「中世」を設定していない。歴史には「節理によって定められた法則」が存在し、その法則は現実の諸事件において「預言の実現」あるいは「神の偉大な計画の作用」(序論)として示されていると述べている。ユダヤ人に対して、「ユダヤ人が選ばれたのは、聖なる救世主が現れるまで、真の神の知識の守り手」(37)となるためだとして特別な位置を認めている。こうした言葉は、キリスト者としての歴史哲学が吐露された部分ではあろう。だが本書が書かれた時代は、まだ19世紀前半である。そうした時代と書かれた場所がイギリスであったということを考えれば、歴史哲学的な部分が歴史記述に混入することにまで目くじらを立てるよりは、彼が具

体的記述では聖書の記述や聖書的な時間と手を切り、文化史、経済史を重視した歴史を提出したことのほうを、より重視すべきであろう。そうした意味で本書は、過渡的性格が強いものの、「啓蒙主義的世界史」に位置づけられよう。ただしそのグラデーションのなかでは、それはキリスト教的歴史哲学が吐露されている点で「19世紀的普遍史」のごく近いところに位置している。また、「啓蒙主義的世界史」としては異例とも言えるほどイギリスの利害をあからさまに振りかざしている点で、ナショナリズム的色彩の強い「世界史」であった。というより、彼自身は自由貿易を唱えつつ海外進出を推進していった「自由貿易帝国主義」者の一員と位置づけることの出来る歴史家であり、本書は、そうした立場からの世界史だったのである。

さて、木村一歩(1850、嘉永3-?)は鳥羽出身で、慶應義塾で英語を学んだ後、明治3年に大学少助教、文部省設置後はその官員となった。以後については、明治17年の『文部省職員録』には文部省編輯局員として局長西村茂樹の下にあったことが記録されている。以後も文部省図書課など部署は代わるが、その在職期間中に歴史書以外にも天文学、教育学その他の諸分野の著作を翻訳し、それらも教科書として同省から出版されている。こうしたことから、彼の訳業は個人的なものではなく、文部省の意向を踏まえた仕事だったと言えるであろう。

木村一歩(文部省)とテイラーとの関係を考える場合、次の二点が重要である。先ず第一は、テイラーの教科書が歴史を文明の進歩の過程とし、エジプト文明から開始していることである。ここでは、人間自体がどこから来たのかという問題は、未解明のまま残される。だが、人類史がキリスト教的な神と切り離され、全体が、文明の進歩の歴史として展開されている。これを受容するに当たっては、「普遍史型万国史」の著者たちのように

“God”の翻訳語選択に頭を悩ましたり、その「換骨奪胎」のために種々思いを巡らしたりするといったことは、必要ないのである。そしてまさにこのことが、つまり、具体的記述では本書が聖書的記述と明確に手を切っていることが、文部省によって評価されたところだったのではないであろうか。ただし、これには、別の問題が絡んでくる。即ち、啓蒙主義的文明史はいわば諸刃の剣であって、一方で啓蒙主義的世界史にはこうした利点があったが、しかしもう一方では、次稿で取りあげるスウィントンのように、むしろ当時高揚していた自由民権運動のほうにつながっていく性格も有していたからである。そして重要な第二点は、この点に関係している。というのは、スウィントンと比較すると、テイラーは、フランス革命や共和主義、とりわけ下層市民の運動や民主主義に対して大変厳しい批判を行っていたからである。啓蒙主義的世界史であれば自動的に自由・平等・友愛や民主主義に連結するというわけではない。啓蒙主義的世界史であってもそれにもまた多様な色彩があり、特にイギリスでは、テイラーのような立場もあり得たのである。しかも彼のフランス革命論は、自由民権運動よりは文部省の立場に近かったと言えるものである。そしてこのことが、文部省が自ら訳出と出版に乗り出した一因となっていたのではないだろうか。その訳業は、スウィントンよりはテイラーのほうを高く評価し、啓蒙主義的世界史と自由民権運動との連携を断ち切るために行われたと考えても、少なくとももうがちすぎとは言えないと、筆者には思われるのである。

だが、いずれは、スウィントンに対する明確な態度表明が必要となることは明かである。実際、木村一步（＝文部省）がテイラーの訳業の終了後に直ちに組み込んでいくのは、スウィントンの『世界史概説』自身の「換骨奪胎」である。そしてその結果、スウィントンを彼が「譯述」した『萬國

歴史』（文部省、明治 24）が出版されていくことになるのである。

### 東京大学の設立と史学専攻の廃止

維新政府は、最初、幕府から接收した諸機関のうち、昌平黌を「大学」、洋書取調所の後身である開成所を「大学南校」、医学所を「大学東校」と改称して存続させた。「大学」には教育行政権まで与えていたが、そこでの漢学派と国学派の抗争に業を煮やし、また文部省が開設されたこともあり、「大学」を廃止した。

その後、1877（明治 10）年、「学制」のもとでも存続させてきた東京開成学校（大学南校の後身）と東京医学校（大学東校の後身）とを合わせて「東京大学」とすることを「布達」した。東京大学の発足である。そこでは法・理・文・医の四学部が置かれたが、法・理・文の三学部に一人の「綜理」（加藤弘之）、医学部にもう一人の「綜理」（池田謙斎）がいて、それぞれ文部省と連絡を取りながら別々に所管学部を運営していた。しかも、学部とは別に、修業年限 4 年で卒業生には大学入学の資格が与えられる「大学予備門」が置かれていた。総理が一人に統合されて加藤弘之が綜理になるのは、明治 14 年になってからである。

文学部は、「史学哲学及政治学科」、「和漢文学科」の二学科編成で出発した。ところが、二年後に早くも、「史学哲学及政治学科」が、「哲学政治学及理財学科」となった。それまで行われていた「欧米史学」の講義は残されたにしても、専攻としての「史学」が廃止され、「理財学」（＝経済学）の専攻が置かれることになった。つまり、「東京大学」の段階では、官学アカデミズム史学などはまだ存在しなかったのである。

### 「翻訳教科書」の著者たち

この官学アカデミズムの不在は、「学制」と「教育令期」における万国史教科書の著者たちの性格を規定することになった。

これまで見てきた「翻訳教科書」の著者たちのうち、まず、「学制」期に活動した人々の大部分は、幕末期から明治維新初期には既に「修業時代」を終えていた洋学者たちであった。当然、彼らは、大学教育とは無縁であった。

「教育令期」に登場してきた翻訳者や教科書の著者たちの場合は（表1・8）、残念ながら経歴が不明の人もあるが、そのほとんどは、天保（1830-44）から安政（1854-60）までに生まれた洋学者であり、多くは、明治10年以前に勉学の期間を終えて、翻訳活動を始めている。彼らが翻訳した分野は歴史学以外の様々な専門分野にもわたっており、また教科書出版後の活動歴も多様である。『萬國史略』（明治13）を刊行した久松義典（1855-1905）は、東京英語学校中退後、明治12年に栃木師範学校の教員となり、やがて校長になった。だがその後自由民権運動に参加し、立憲改進党に入党して政治家、ジャーナリストとなっている。また、永井謙蔵（1857-1914）の場合は、明治10年に慶應義塾を卒業して千葉師範学校講師となり、12年にフリーマン『西洋史略』を翻訳しているが、その後、衆議院議員となっている。

しかし、安政でも、安政5年に生まれ、後に帝国大学文科大学史学科の教授となっていく坪井九馬三も、東京大学の卒業生である。次稿で述べる天野為之は文久1（1861）年に生まれ、明治15年に東京大学文学部の政治理財学科を卒業した。このように万延（1860）、文久（1861-1864）以後に生まれた世代になると、東京大学の出身者が多くを占めるようになってくる（慶應義塾卒業生も一定の役割を果たしている）。そして「万国史の時代」の後半に当たる「文明史型万国史」の時代になると、東京大学出身者たちが中心的な活動を展開することになる。ただし、東京大学では、歴史専攻が消滅していた。従ってなお歴史学の専門教育の場は存在せず、「教育令期」中に東京大学で学んだ

世界史教科書の著者のうちには、当然ながら、歴史学の専門教育を大学で受けた人は存在しない。教科書の執筆者が専門家でなければならぬか否かなどといった議論以前に、当時は、専門家自体が存在しなかったのである。

世界史教科書の歴史では明治20年代もなお翻訳教科書の時代であるが、翻訳という形で、あるいは英米の歴史家の権威に頼って教科書が編まれたのは、このような歴史学をめぐる状況の反映だったと言える。

### おわりに

世界史が「万国史」と呼ばれていたことを初めて知ったときは、まずは驚いた。だがその実情を或る程度知った段階で特に筆者の興味を引いたのは、日本における最初の世界史教科書が、西欧の教科書に基づく「翻訳教科書」だったということである。そして「はじめに」でも述べたように、このことが契機となって、これまで西欧における世界史記述の歴史を追求してきた筆者が、明治期の世界史教育の研究に係わることになった。というのは、19世紀後半における西欧の歴史教科書の世界では、伝統的なキリスト教的世界史（普遍史）とこれに対立する啓蒙主義的世界史とが、対立しつつなお併存もしていたからである。そうした状況の中で、教科書の著者＝翻訳者たちは如何なる意識から、どちらを選択したのだろうか。また、明治20年、ドイツ近代歴史学が、ランケの弟子リースによって「帝国大学」に伝えられた。このドイツ近代歴史学は、明治期の日本の世界史教科書づくりと、どのような関係を持ったのだろうか。このような疑問が次々とわいてきた。

こうした疑問を解くため、筆者は、翻訳教科書とその原典との関係を検討してきた。その結論は、普遍史と啓蒙主義的世界史が、共に、但し、時を前後して選択され、その結果、世界史教育史上で



は同じく「万国史」の名称下にありながら「普遍史型万国史」と「文明史型万国史」という二つの時代があったということ、また「万国史の時代」の終焉には、ドイツの近代歴史学が重要な役割を果たしたということである。

本稿は、こうした議論のうち「普遍史型万国史」の時代のみを対象にしたものである。次稿ではもう一つの時代、「文明史型万国史」の時代について述べることにしたい。

- ・引用文の所在が明らかな場合は、頁数を本文に記した。
- ・引用文にあるゴシックは原文にあるものである。また〔〕内の言葉は、筆者が補充したものである。
- ・利用した諸教科書、文部省関係文書のうち、特に断りのないものは、全て国会図書館「近代デジタルライブラリー」所収のものである。
- ・アメリカの教科書の多くは日本の諸大学にも存在するが、アメリカの Library of Congress にほぼ全てが収められている。
- 1 『史畧』、『萬國史畧』が依拠している原典の『パーレー萬國史』に関しては、木全清博「万国史教科書の内容分析（1～3）」（『滋賀大学教育研究所紀要（22～24）』1988-1990、以下では「上掲論文（1）」等と表示する）はじめ、第1章の2で見るような諸論考が存在する。しかし他の原典については、近年の、南塚信吾「西村茂樹『万国史略』とA.F.タイトラー『一般史』—世界史の方法をめぐる—」（熊田康章編『国際文化研究への道』彩流社、2013、以下では南塚①）、及び、同、「箕作麟洋と『万国新史』の時代」（上掲書所収、以下では南塚②）を挙げることが出来る程度である。
- 2 「万国史の時代」に関する筆者の時代区分=章立ては松本通孝「明治期における国民の対外観の育成——「万国史」教科書の分析を通して——」（増谷英樹、伊藤定良編、『越境する文化と国民統合』東京大学出版会、1998、所収）に基づいているが、それは、筆者の万国史の変遷の調査と一致していたからでもある。またこの時代区分は国立教育研究書編集発行『日本近代教育百年史』（第3巻、第4巻、ともに1974）の教育制度史の区分にもほぼ対応しているので、教育制度史に関しては本書の用語を借用した。
- 3 表の系統図は本稿が記述の対象とする諸学校の関係のみを示しており、師範学校その他は省略している（以後も同様）。
- 4 木全清博「明治初年の万国史教育の実態」（『滋賀史学会誌』第7号、1989）による。
- 5 日本史で挙げられている教科書『王代一覧（全7巻）』は林羅山の息子林鷲峯が慶安5（1652）年に編んだ神武天皇から第106代正親町天皇までの歴史、『國史略（全5巻）』は、巖垣松苗が天正6（1726）年に編んだ神代から第107代後陽成天皇までの歴史である。
- 6 なお文部省は、明治6年以後は東京師範学校の小学教則を推奨し、これが全国に広まっている。それによると下等小学の中心教科は読物、算術、習字、問答の四科目とされ、歴史、地理などの科目は独立させず、「問答」と「読物」という二つの科目の中にこれらの内容を適宜配置して教える

こととされた。「問答」は文字通り教師と生徒の問答で進め、生徒は回答を暗記して基礎知識を身につける授業、「読物」は、教科書を定め、生徒が読み、教師が説明を加えながら進めていく授業であった。歴史は、まず「問答」のなかで、日本史が下等小学の第三級、万国史は下等小学第一級で教えられた。「読物」における日本史は下等小学最終学年から上等小学第七級までに、万国史は、上等小学第三級から第一級で教えることとされた。結局ここでも、「小学規則」同様、教科書を使用した万国史の授業は、12歳以後に行われたということになる。

- 7 本稿で利用したのは、以下のものである；
  - ・文部省『史略』文部省、明治5。
  - ・師範学校編輯『萬國史畧』文部省、明治11。なお、以後はこれを「官版『萬國史畧』」と表記する。
- 8 小沢栄一『近代日本史学史の研究 明治篇』（吉川弘文館、昭和43）、552-553頁による。次の福沢諭吉の例も同頁。
- 9 竹内弘行『十八史略』講談社学術文庫、2008、49頁。
- 10 なお、「フランス革命」という用語が一般化する年代については、「明治八、九年以後」とされる（南塚②、378頁）。
- 11 本稿では、聖書に記述されたアッシリア及び今日のアッシリアと区別するために、古代ギリシア人の伝えるアッシリアを、特に「伝説のアッシリア」と表現する。なお、「伝説のアッシリア」から今日のアッシリア像への変化については、後にまとめる（註29）。
- 12 Goodrich, S.G., *Peter Parley's Universal History, on the Basis of Geography*, 1870 (1st ed. 1837). 東京大学所蔵。
- 13 海後宗臣・仲新編『日本教科書体系 近代編、第20巻、歴史3』（講談社、1963）、535頁。
- 14 阿野文朗『パーレー万国史』と文明開化 阿野文朗編著『アメリカ文化のホログラム』松柏社、1999、13頁。
- 15 『パーレー萬國史』の内容分析とアメリカに於けるその位置、日本との関係について最も詳細な研究は、管見のかぎり、註1にある木全清博氏の上掲論文、特に、その（3）である。筆者はこれから多くの恩恵を受けているが、しかしここでも、西欧におけるその位置までは言及されていない。
- 16 福沢諭吉「三田演説第百回の記」（慶応義塾編纂『福澤諭吉全集』第4巻、昭和34）、477頁。
- 17 倉澤剛『學制の研究』（講談社、昭和48）、711頁。
- 18 木全清博、上掲論文（3）、37頁。ただし、『パーレー萬國史』は、この時も注文され、文部省の編輯寮のスタッフだった寺内章明や牧山耕平たちに渡されたにしても、文部省がこれを入手したのは、この時が最初というわけではないようだ。というのは、牧山耕平『巴來萬國史』は明治9年刊行だから別として、本書を「訳篇」した寺内章明の『五洲紀事』の刊行が明治4年であるし、また『史略』も明治5年に出版されていて、明治5年より前に既に文部省が所有していたと考えないと、年代が合わなくなるからである。
- 19 佐藤孝己「S.G.グッドリッチと『パーレーの万国史』」（『英学史研究』第2号、1970）、16頁。この論文では「おそらく明治時代に英語を学んだ人でこの本のことを知らない者はいないであろう」（同）とされるが、他方では「もともと『パーレーの万国史』は子供向けの本であって学問的価値も低いものである」（13）とされ、全体として、阿野文朗氏と同様の評価が記述されている。こうした見解が従来の評価の共通点と言えるが、しかしまた、その西洋史学史における位置について指摘されていないことも同様である。
- 20 新渡戸稲造「帰雁の蘆」（『新渡戸稲造全集』第6巻、教文

- 館、昭和44)、19頁。
- 21 小沢栄一、上掲書、327-328頁。
- 22 大村喜吉、高梨健吉、出来成訓編『英語教育史資料 第3巻』(東京法令出版、昭和55)、4頁。
- 23 長谷川如是閑「ある心の自叙伝」(『世界教養全集28』平凡社、1963)、294頁。
- 24 筆者が多くを負っている国会図書館の「近代デジタルライブラリー」では、1915(大正3)年の紀太藤一の『パーレー萬國史』訳注が最後の例である。
- 25 阿野文朗、上掲書、5頁。
- 26 太田三郎「ホーソンとパーレーの万国史」(『英語青年』第105巻11号、1959)、30-31頁。
- 27 木全清博氏は上掲論文(3)のなかで『パーレー萬國史』の基本的特徴の一つを「文明開化史観」(41)とされている。グッドリッチ(ホーソン)は確かに未開から開化への「進歩」やその諸段階、アジアの「停滞」などについて語っている(第五章)。だが、彼はアジアの「停滞」の原因について、「アジアの真の困難は、彼らが福音について知らないどころか、多くの誤った宗教を信じていることにあると思われる」(131)と議論を進めていく。そしてマホメット教、ヒンズー教、仏教などを列挙しつつ、「こうして、アジアのほとんど全てが神の特質と人間の使命に関して暗闇に閉ざされているということ、そして人々の行動が、そのような無知と誤りが横行している場所ならそうなるだろうと予期されるようなたぐいのものに陥ってしまっていることがわかる」(132)と結論づけている。グッドリッチの議論は、一見、啓蒙主義的な意味での「文明開化史観」のように見える。また「文明」の問題を扱うことは、「19世紀的」ではある。しかし、このようにヨーロッパの進歩とアジアの停滞の原因をキリスト教との関係に求めることは、啓蒙主義とは本質的に異なった立場での議論だと考える。
- 28 ピーター・ゲイ著、中川久定、鷺見洋一、中川洋子、永見文雄、玉井道和訳、『自由の科学』(ミネルヴァ書房、1982、原著は1969)。本書は原著(Gay, Peter, *The Enlightenment: An Interpretation*, 2 vols, New York, 1967-69)の第二巻(*The Science of Freedom*, 1969)を訳したものである。
- 29 伝統的普遍史に於けるアッシリアと今日のアッシリアとを単純に同一視すると、大きな誤解が生ずる。「普遍史」における第一の世界帝国をギリシア人が伝えるアッシリア(=「伝説のアッシリア」)とし、前8世紀半ばに滅んだとしたのは、アウグスティヌスであった。しかし彼はその後、ブル(ティグラトピルセル3世、744-727BC.)やイスラエル王国を滅ぼしたシャルマネセルなど、『烈王紀下』に登場する前8世紀以後のアッシリア諸王や、四世界帝国論を述べているダニエル書がその最初の国をネブカドネザルの新バビロニアと明示していることを無視していた。この聖書との矛盾を「解決」したのが、ルターの片腕だったメラニヒトンである。彼は二つのアッシリアを、即ち「第一のアッシリ(=「伝説のアッシリア」)」と「第二のアッシリア(または「後のアッシリア」=「聖書のアッシリア」)」を設定した。そしてダニエル書の第一の世界帝国は、これら二つのアッシリアに加えて第二のアッシリアを滅ぼした新バビロニアまでを含んでいるとして、「カルデア人の帝国」と呼んだ。これによって旧来のアッシリア論と聖書との矛盾を解消しようとしたのである。この二つのアッシリ

- ア論は、プロテスタントの普遍史特有の見解となった。
- 二つのアッシリア論は、「19世紀の普遍史」を介して、西村茂樹『校正 萬國史略』など『翻訳教科書』にも流れ込んでいる。だが、官版『萬國史略』はアッシリアを滅ぼした新バビロニアについて「ニネウアを都とし、國をバビロニアと稱す。或は、之を、後のアッシリアとも稱し、國勢頗る隆盛なり」と述べ、その最盛期はユダヤ国を亡ぼした「ネブカドネザル王」時代だと述べている。この間違いは、『パーレー萬國史』(グッドリッチ)がプロテスタントの普遍史では定説だったため何の説明もなく新旧二つのアッシリアを記述しているの(44f)、事情を把握できていなかった官版『萬國史略』の著者が、「第二のアッシリア」と「新バビロニア」とを混同してしまったことで生じたものであろう。
- 一方、アッシリアの遺跡発掘は1845年から開始され、これによって成立した「アッシリア学」により、前19世紀から前612年に至る長大なアッシリア史が明らかに become、今日のアッシリア史像となった。また「伝説のアッシリア」が今日のアッシリア史に基づいて批判的に吟味され、アッシリア史全体を比較的好く反映していると再評価されるようになった。
- 30 伝統的普遍史ではキリスト生誕で時代を大きく二分したから、「古代」と「近代」に区分すればよかった。「19世紀の普遍史」もローマ滅亡=西欧各国の発生から現在までを一連の時代と考えるから、『パーレー萬國史』がそうだったように、「中世」を必要としない。「中世」は、「古代」を「生の時代」、「近代」をその「再生の時代」とし、両者の間にある時代を「死」の時代=「中つ世」とするルネサンス的な意識が中核となって生まれた。
- なお、三区分別を歴史記述に初めて取り入れたのはケラーのプロテスタント的普遍史(17世紀末)だったが、これを啓蒙主義的世界史の時代区分へと鍛え上げたのは「ゲッティンゲン学派」のシュレーツァーである。この点については、拙稿「ドイツ啓蒙主義歴史学研究(II-2.完) —A.L.vonシュレーツァーにおける「普遍史」から「世界史」への転換—」(『埼玉大学紀要教養学部』第47巻2号、2011)を参照されたい。
- 31 『日本教科書体系 第20巻』、541頁。
- 32 木全清博、上掲論文(1)、37頁。
- 33 国立教育政策研究所付属の教育図書館に第1巻のみが収められている。この数値は、第1巻から推定した。
- 34 『日本教科書体系 第20巻』、544頁。
- 35 Tytler, A. F., *Elements of General History, Ancient and Modern*, Oliver & Boyd, Edinburgh; Simpkin, Marshall & Co., London, 1873 (1st ed. 1801). 本書からの引用は、筆者が参照できた、1873年版(所在は京都大学)の頁数で示す。
- 36 Welter, T.B., *Lehrbuch der Weltgeschichte für Gymnasien und höhere Bürgerschulen*, 1st ed. 1826.
- 37 Emma Hart Willard, *A System of Universal History in Perspective*, 1st ed., 1835. 引用頁数は、筆者が利用できた1873年版で示す。
- 38 木全清博、上掲論文(1)には西村茂樹『萬國史略』の詳しい内容紹介があり、『校正 萬國史略』とともに「西村の本は明治初年の万国史書の一つの典型となった」(37)と評価されている。
- 39 Wijnne, J. A., *Beknopt Leerboek voor de Algemeene Geschiedenis*, 3 dln, 2 de druk. Groningen, 1856-57. ; HATHI

TRUST Digital Library による。

なお発音に即した表記は「ウェインネ」であろうが、西村は「文聶」としている。本稿では西村の表記を使用している。

<sup>40</sup> 南塚①、331 頁。

<sup>41</sup> 新井白石著、村岡典嗣校訂『西洋紀聞』（岩波文庫、1982）、84 頁。本書は長く秘されていたが、19 世紀初頭頃以後、蘭学者や知識人たちの間に流布した。

<sup>42</sup> 平田篤胤『本教外篇』（1808）は、マテオ・リッチの『畸人十篇』、アレニ『三山論学記』、パントーハ『七克』という中国語キリスト教書からの抜き書きといってもよさそうな著書である。そこでは、原典に「天主」とあるところを「上帝」、「天帝」、「産靈大神」などに置き換えつつ、自己の見解を組み立てていることが見て取れる。特にその「二の上」とアレニ『三山論学記』との関係について、海老沢有道氏は、「創造主宰神観から来世観、善悪応報観等々、全てキリスト教教理をそのままに改竄して彼自らの思想の如く述べる」（『南蛮学統の研究 増補版』創文社、昭和 53、416 頁）とし、さらに、本書全体に上記の他の二篇も含めた諸原典の改竄や直訳文が見られると指摘しておられる。「改竄」とまでは言えないとする議論もあるようだが、坂本春吉『平田篤胤の復古神道とキリスト教 — 本教外篇の研究』（坂本イナ、1986）にある『本教外篇』本文と上記三篇の原典との対照表を見ると、彼の神道思想に対し、根本的なところでキリスト教の影響が認められるように思われる。また、これらの禁書を彼が入手できたことも、禁書政策のほころびを示していて興味深い。

<sup>43</sup> 「典礼問題」で問題となった「Gods」の訳について、カトリックでは、1715 年、「上帝」と訳すことが禁じられ、以後は「天主」のみを使用することとなった。しかしプロテスタントでは「神」と訳すべきだと考えるカルバートソンらアメリカ人宣教師と、「上帝」とするイギリス人宣教師の間で折り合いがつかず、19 世紀半ば以後はそれぞれが別の中国語訳聖書によって中国での布教に当たっていた。このうちカルバートソンらの中国語訳聖書は 1873（明治 6）年以後何度か日本でも出版され、それが、1887（明治 20）年のヘボン等による文語訳の旧約聖書の完成へと結びついていくことになる（柳父章『「ゴッド」は神か上帝か』岩波現代文庫、2001、117 頁以下。鈴木範久『聖書の日本語』岩波書店、2014、第 2、3 章）。

<sup>44</sup> 近年の研究では「西村が西洋の歴史に着目するにいったのも、…手塚の影響が大きかったのではないかと思われる」（渡辺将之『西村茂樹研究 — 明治啓蒙思想と国民道徳論』思文閣出版、2009、31 頁）とされている。即ち、西村が西洋史に注目しはじめたのは、文久元年に手塚律蔵門下に入った後であった。師の手塚律蔵の『泰西史略』は、Pölit, Karl Heinrich Ludwig, *Kleine Weltgeschichte, Leipzig*, 1808 のオランダ語訳書からの重訳であるが、本書はカント法学を奉じていたベリッツによる歴史教科書である。人類初期（アダムや大洪水など）を「神話の古代」（35、Google Scholar による）と呼び、「本来の信ずべき歴史は、…国家の成立と形成によって始まる」（18）として国家の成立を歴史の起点とし、創世紀元を否定してキリスト紀元のみで記述している。従って、これは啓蒙主義的世界史であった。また、西村が訳した『百代通覧訳叢』の原著（ウインネ）も啓蒙主義的世界史であった。彼が最初に接したのは啓蒙主義的世界史だったということになりそうだ。西村がいつ

キリスト教的歴史観に接したのかは明確にはわからないが、こうした経緯からは、後述する山村才助以来の流れに早くから接していたというよりは、エマ・ウィラードやヴェルターらの著書で接し始めた可能性のほうが高いようだ。

<sup>45</sup> 南塚①、326-331 頁による。

<sup>46</sup> 引用頁数は西村茂樹編『校正萬國史略（巻ノ十、上）』（明治 8）による。

<sup>47</sup> 田中彰、宮地正人編『歴史認識（近代日本思想体系 13）』、岩波書店、1991、554 頁。

<sup>48</sup> 物的爾著、珀爾侃訳、西村鼎重訳『泰西史鑑（上中下 30 巻）』稲田佐兵衛、明治 2-14。西村茂樹は明治 4 年 8 月に「鼎」から「茂樹」に改名したが、本書は「鼎」の名で出版している。

<sup>49</sup> 『日本教科書体系 第 20 巻』、546 頁。

<sup>50</sup> 小沢栄一氏は、「対照して確認したわけではないが」としつつ、「Henry White, History of England for Junior Classes. Edingburgh, 1870. であろうか」（上掲書 91 頁）とされているが、筆者は以下の書と推定している；White, H., *Outlines of Universal History*; Oliver & Boyd, Edinburgh ; Simpkin, Marshall & Co., London, 9th ed., 1870 (1st ed. 1853)；岐阜大学図書館所蔵。

<sup>51</sup> 「降生」は、元来は釈迦など「神仏、君主、聖人などの生まれること」を意味した。これに対し中国では、例えばアレニ『三山論学記』（註 42 参照）は、イエスの「受肉」の意味で、「降生」と同義だが別の言葉、「降世」を使用していた。

『日本国語大辞典』（小学館）には「然るに天主降生の後は…」という、貞方良助のキリスト教護教書『夢醒真論』（1869）からの文章が引用されており、明治初期からはキリスト教的な「受肉」の意味での「降生」の語の使用も行われている。

寺内章明の「降生」の意味は、神による天地の「創造」の記述を遠ざけた上でこの語を使用していることから、キリスト教的な意味は含まず、最初の人間という意味で特別な人間であるアダムについて、古来の使用例に準じて使用したと考えてよいと思われる。

<sup>52</sup> 南塚①、320、及び 331 頁。

<sup>53</sup> 海老沢有道、上掲書、334 頁。

<sup>54</sup> Gottfried, Johann Ludwig, *Joh. Ludov. Gottfriedi historische Chronica, oder Beschreibung der fürnehmsten Geshichiten / so sich von Anfang der Welt / biss auff das Jahr Christi 1619. zugetragen. Nach Ausstheilung der vier Monarchien / und beygefügtter Jahr= Rechnung/auffs fleis sigste in Ordnung gebracht / vermehrt / und in acht Theil abgetheilet : Mit viel schönen Contrafaicturen / und Geschichtmässigen Kupffer=Stücken /zur Lust und Anweisung der Historien / gezieret / an Tag gegeben / und verlegt. Amsterdam, 1660*（本書はゲッティンゲン大学が公開している）。本書のオランダ語訳書が才助の原典であったことを示したのは、岩崎克己「山村才助の著譯とその西洋知識の源泉に就いて」（『歴史地理』77-4、1941）である。

タイトルを直訳すれば、『ゴットフリートの歴史年代記、又は世界開闢から 1619 年に至る最も重要な歴史の記述』であり、その副題には、「四つの世界帝国（Monarchie）の区分によって編成された」と明記されている。これを『西洋全史』としたのは、上記の岩崎論文の表現に拠った。

<sup>55</sup> ゲーテ『詩と真実』第1部第1章(『ゲーテ全集 9』人文書院、昭和35)、30頁。

<sup>56</sup> スカリゲルについては拙著『聖書VS.世界史』(講談社現代新書、1996)で説明しておいた。ここでは、二人の年号の比較に止めておきたい。以下の諸年号のうち( )内の数値がゴットフリートのものである；

大洪水 1656 (1657)、アブラハムの召命 2024 (2024)、出エジプト 2454 (2454)、第一神殿造営 2933 (2933)、第一神殿破壊 3361(3360)、捕囚から解放 3390 (3390)、第二神殿再建 3430 (3528)、イエス生誕 3948 (3947)、イエス紀元元年 3950 (3950)

二人の間では第二神殿の再建開始の年号のみが大きく異なっている。これは聖書にある「ダリヨス」をスカリゲルが Darius Hystaspes (ダリウス1世)とするのに対しゴットフリートは Darius Nothos (ダリウス2世)と考えているからである。

<sup>57</sup> メランヒトンの第一の世界帝国が新旧二つのアッシリアと新バビロニアを含むものだったことについては、註 29で述べておいた。

<sup>58</sup> 詳しくは、大久保利謙『近代日本史学史』(白楊社、昭和15)、第3章及び第5章。小沢栄一『近代日本史学史の研究 ― 一九世紀日本啓蒙史学の研究 ― 幕末篇』(吉川弘文館、昭和41)、148以下。なお、大久保、小沢の両氏は、上で引用した海老沢氏と異なり、山村才助よりは佐藤信淵のほうを組織だった西洋史記述の開始者と評価しておられる。

<sup>59</sup> 『文部省第九年報』(明治14)、17頁。

<sup>60</sup> 『日本近代教育百年史 第3巻』、1135頁。

<sup>61</sup> 堀越愛國『近世西史綱紀』(文部省、明治4)。なお、「近代デジタルライブラリー」に採録されているのは、以下のものである；ウキルソン著、堀越愛國、保田久成訳『近世西史綱紀(全10巻)』東京師範学校、明治10(保田久成訳は、このうち第8―10巻)。

<sup>62</sup> 保田久成『続西史綱紀(2巻2冊)』(東京師範学校、明治12)。

<sup>63</sup> 佐藤秀夫編『文部省日誌、明治十五年自第一号至第四十号(明治前期文部省刊行集成 第五巻)』(株式会社歴史文庫、昭和56)、49頁。

<sup>64</sup> 同上、236頁。

<sup>65</sup> 公的資料には『文部省年報』と『文部省日誌』などがあるが、前者にある「教科書調査一覧表」にしても、文部省自身、調査は「僅ニ弊害ヲ遏止スルノ堤防ニ止マリテ適當ノ教科書ヲ撰擇スルノ標準トナスモノニ非ス」とし、また日々多くの教科書が出版されつつあり、「之ヲ網羅スルコト能ワサル」(「文部省示諭」) 情況だと述べて調査の限界を自ら指摘している。ここでは『日本教科書体系(第20巻)』にある「歴史教科書総目録」や国会図書館「近代デジタルライブラリー」などから補充して表を作成した。また、鳥居美和子『明治以降教科書総合目録(教育文献総合目録第三集、II 中等学校編)』小宮山書店、昭和60)、東書文庫「東書文庫所蔵教科用図書目録」(1999)も参照した。

<sup>66</sup> 小沢栄一、上掲書(明治編)、328頁。

<sup>67</sup> 小沢栄一氏の「万国史から文明史に転化」という認識については、筆者は疑問を感じている。教科書の世界ではなお「万国史の時代」が継続しており、そのなかで、「普遍史型

万国史」から「文明史型万国史」への「転化」が進行するからである。

<sup>68</sup> Taylor, W.C., *A Manual of Ancient and Modern History*, New York, 1876 (1st ed. 1836-38). 木村一步等が翻訳したのは1867年のニューヨーク版だが、筆者が利用できたのは、1876年のニューヨーク版である。

<sup>69</sup> Arnold Hermann Ludwig Heeren (1760-1842)。彼はガッテラー、シュレーツァーらの歴史学を継承した、「ゲッティンゲン学派」の最後の代表者であった。世界史記述に大きな影響を与えたのは以下の著である；Heeren, A.H.L., *Handbuch der Geschichte des europäischen Staatensystems und seiner Kolonien*, 1809.